リシモノハ勅令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ當該公務員又ハ之ニ準スヘキ者ノ遺族ニ給シ遺族ナキトキハ死亡者ノ相續人ニ給ス

◎恩給金殘額給與ノ規定ナリ

第十一條　恩給ヲ受クルノ權利ハ之ヲ讓渡シ又ハ擔保ニ供スルコトヲ得ス恩給ヲ受クルノ權利ハ之ヲ差押フルコトヲ得ス但シ國稅徵收法又ハ國稅徵收ノ例ニ依ル場合ハ此ノ限ニ非ラス

◎軍人恩給ハ差押ヲナスヲ得ルヤ

民事訴訟法ノ後ニ公布セラレタル軍人恩給法ニヨリ軍人ノ恩給ハ絕體ニ差押ヲ禁シタルカ故ニ民事訴訟法第六百十八條第二項ハ軍人ノ恩給ニ對シテハ其ノ適用ヲ除外セラルルモノトス（大審院大正三年判決）

◎恩給ヲ担保ニ金錢ノ貸借ヲナスハ法律上有効ナリヤ

恩給金受領者ニ於テ單ニ恩給金ノ受領ヲ債權者ニ委任シ同時ニ債權者ガ其ノ受領シタル恩給金ヲ以テ債務ノ辨濟ニ充當スベキコトヲ約スルハ假令担保名義ノ下ニ恩給證書ヲ債務者ニ交付スルモ債務者ハ何時ニテモ委任ヲ解除シ之ガ返還ヲ請求シ得ベキヲ以テ恩給法ノ禁示規定ヲ回避スル脫法行爲ト目スベキモノニ非ズ（大審院大正六年判決）

注意　恩給金額受領ノ委任契約ヲ一定ノ期間內ハ解除セザル旨ノ特約ヲナストキハ脫法行爲ニシテ無效ナレトモ然ラズシテ何時ニテモ委任契約ヲ解除シ得ル場合ノ担保契約ハ有效ナルモノトス

◎恩給ニ關スル債務者ハ貯金局ナリヤ

國稅徵收法施行規則第十四條ハ差押ノ目的ヲ達スルニ最モ適當ナル地ノ收稅官吏ニ引繼ヲナサシムル趣旨ナルコトハ被告カ解スル所ノ如シト雖モ國稅徵收法第二十三條ノ一ニ依レハ債權ノ差押ハ債務者ニ對スル通知ヲ以テ之ヲ爲スヘキモノニシテ此ノ通知ハ債務者ノ住居地ノ收稅官吏ニ於テ之ヲ爲スヲ最モ適當トスルカ故ニ同法施行規則第十四條ニ所謂財產所在地ハ債權ニ就テハ債務者ノ住居地ヲ指稱スルモノト解

スルヲ相當トス從テ被告ノ此ノ點ニ關スル主張ハ採用シ難シ

而シテ大正十二年勅令第三百六十九號恩給給與規則第二十七號ニ恩給ノ支給ヲ受ケントスルモノハ其ノ恩給證書又ハ裁定通知書ヲ支給廳ニ呈示スヘシ第二十九條ニ支給廳ハ年金タル恩給ヲ受クルノ權利ノ消滅シ又ハ停止セラルヘキ原因タル事實アルコトヲ知リタルトキハ其ノ支給ヲ止メ速ニ其ノ旨ヲ裁定官廳ニ通知スヘシトアリ（中略）

又大正十二年閣令第七號恩給給與規則第六條ニ內閣恩給局ニ於テ給與ノ裁定ヲ爲シタルトキハ貯金局ニ其ノ旨ノ通知ヲ爲スト共ニ恩給證書又ハ裁定通知書ヲ作リ請求者ニ之ヲ通知スヘシトアリ又國庫ノ支辨ニ屬スル年金恩給ノ支給手續ニ關スル明治四十三年勅令第二十五號ニ基ク大正十二年遞信省令第九十二號年金恩給支給規則第九條ニ受給者支給期間ヲ經過シタル從ニ於テ給與金ノ支給ヲ受ケントスルトキハ給與ニ關スル證書ノ種類及記號番號給與金高並支給郵便局名等ヲ記載シタ

ル支給請求書ヲ貯金局ニ差出スヘシ（中略）本件ノ如キ國庫ノ支辨ニ屬スル恩給ニ付テハ其ノ支給廳ハ貯金局ナリト解スヘク從テ此ノ種ノ恩給ノ債權ニ付テハ國稅徵收法ノ適用上債務者ハ貯金局ナリト解スルヲ相當トスルカ故ニ本件恩給ノ債權ニ就テハ貯金局ノ所在地ヲ以テ其ノ所在地ト解スヘキモノトス（大正十五年行政裁判所判決）

第十二條　恩給ヲ受クルノ權利ハ勅令ヲ以テ定ムルモノヲ除クノ外內閣恩給局長之ヲ裁定ス

◎恩給ニ關スル裁定官廳ニ付キ規定シタルモノナリ

第十三條　行政上ノ處分ニ因リ恩給ニ關スル權利ヲ侵害セラレタリトスル者ハ處分後一年內ニ內閣恩給局長ニ具申シ其ノ裁決ヲ求ムルコトヲ得

前項ノ裁決ニ不服アルモノハ裁決ヲ受ケタル日ヨリ六月內ニ內閣總理大臣ニ訴願シ又ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第一項ノ具申ニ關スル規程ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

◎恩給權侵害ニ對スル行政救濟ノ規定ナリ行政救濟ノ方法ハ（一）具申（二）訴願（三）行政訴訟ノ三トス

（一）具申

行政上ノ處分ニヨリ恩給ニ關スル權利ヲ侵害セラレタリトスル者例ハ恩給ノ請求ヲ爲シタルニ不拘ソノ請求書ヲ勝手ニ經由官廳カ却下シ或ハソノ請求書ヲ遞達セスソノママ放任スルカ如キ場合ハ具申ヲ提起シ得

具申ハ內閣恩給局長ニ對シテ處分後一ケ年內ニ爲スヘシ

具申ノ書式　別ニ規定ナシ自由ニ作成シテ可ナリ唯內閣恩給局長以外ノ者カ爲シタル行政處分ニ對シテハ具申書ハ其ノ處分ヲナシタル官廳ヲ經由スルコトカ必要ナリ

（二）訴願

具申ヲナストキハ必ス裁決アリ此ノ裁決ニ對シテ尙不服ノ者ハ裁決ヲ受ケタル日ヨリ六ケ月以內ニ內閣總理大臣ニ訴願シ又ハ行政裁判所ニ訴ヲ提起スルコトヲ得其ノ何レノ方法ヲトルモ自由ナリ

（三）行政訴訟

內閣恩給局長ノ爲シタル具申裁決ニ不服アルモノハ行政訴訟ヲ行政裁判所ニ提起シ得ヘシ但シ內閣ニ訴願ヲ爲シタル場合ハ行政訴訟ハ提起シ得サルモノトス

◎具申及訴訟ノ實例

訴願人ハ大正二年六月島根縣ヨリ松江警察署ヲ通シ受領シ居タル退隱料ノ受取方ヲ松江市在住ノ中島一郎ニ委任シタル旨同署ニ届出タルモ其ノ後委任ヲ解除シタルニヨリ大正四年一月四日解任届ヲ同署ニ提出シタルヲ以テ中島一郎ハモハヤ退隱料ヲ受取ルヘキ權限ナキニ拘ラス中島ハ大正三年十月ヨリ同六年三月ニ至ル二ケ年半分ノ退隱料百五圓ヲ松江警察署ヨリ詐取シタルコトヲ大正六年六月ニ至リ之ヲ知リ大正

九年十一月五日ヲ以テ大正四年一月委任ヲ解除シタル旨屆出テ未拂金額ノ支拂ヒヲ求メタルニ既ニ同署ハ代理人ニ支拂ヒタル部分ヲ除キ支拂ハレタリ

然レトモ苟モ委任ヲ解除シタル以上ハ委任狀ハ無效ナルヲ以テ無效ノ委任狀ニ基キテ支拂ヒタル松江警察署ハ當然訴願人ニ對シ再ヒ支拂ハサルヘカラサル筋合ナルヲ以テ松江警察署ニ對シ救濟ヲ求メタルニ同署ハ大正十二年十月十五日付指令書ヲ以テ一度委任シタル中島一郎ニ對シ支拂ヒヲナシタル以上再度支拂ヒヲナスヘキモノニ非サル旨回答シタルニ依リ恩給法第十三條第一項ノ規定ニヨリ內閣恩給局長ニ對シ具申シタルニ內閣恩給局長ハ具申期間ヲ經過シテ爲サレタル不適法ノモノトシテ之ヲ却下シタルニヨリ訴願人ハ訴願ヲナシタルモノナリ

◎訴願

松江警察署カ訴願人ノ大正九年十一月五日ヲ以テ大正四年一月委任解除ヲ爲シタル旨ノ屆出ニ接シ未拂退隱料ノ支給ノ請求ヲ受ケ未拂ノ退隱料額ヲ一時ニ全部支拂フヲ相當トスルニ拘ラス大正九年十二月二十七日ニ一部留保ヲ爲サスシテ單ニ大正六年四月ヨリ大正九年九月迄ノ退隱料ノミヲ支拂ヒ却テ其レ以前タル大正三年十月ヨリ大正六年三月迄ノ分ヲ支拂ハサリシハ之ヲ以テ大正三年十月ヨリ同六年三月迄ノ退隱料ヲ支拂ハストスルノ少クトモ默示ノ意思表現ニ依ル行政處分アリタルモノト認ムルヲ相當トスヘク從テ恩給法第十三條第一項所定ノ一年ノ具申期間ハ此ノ處分アリタル大正九年十二月二十七日ノ翌日ヲ以テ起算日トスヘキモノトス而シテ行政處分ハ原則トシテ相手方ニ受領セラルルヲ要スト雖モ此ノ受領ハ必スシモ書面ニ依ルヲ要セス口頭又ハ默示ノ意思表現ヲ以テ爲スコトヲ得ルモノナルヲ以テ少クモ默示ノ意思表現ニ依リ爲サレタル右松江警察署ノ處分ハ行政處分トシテ成立スル所ナシト謂ハサルヘカラス而シテ右ノ不拂處分ニ對シ訴願人ハ島

根縣廳ニ具申書ヲ提出シ同署ハ翌大正十年一月十三日松江警察署長ヲシテ爲念訴願人ニ對シ再度示達セシムル所アリタルモノナルヲ以テ訴願人ノ拔用スル大正十二年十月十五日附松江警察署長ノ指令書ハ大正九年十二月十七日既ニ完全ニ成立シタル不拂處分ニ關スル單純ナル注意的ノ通告ニ過キスト解スルヲ正當トス從テ右指令書受領ノ日ヨリ具申期間ヲ計算スヘキニ非ス（大正十四年十一月二十四日訴第一號裁決

恩給局編纂恩給法總覽十六頁）

◎恩給ニ關スル行政訴訟ノ實例

昭和四年二百三十八號

判決

東京府荏原郡目黒町大字上目黒十番地

原告　池上正人

右原告ヨリ內閣恩給局長下條康麿ヲ被告トシテ提起シタル昭和四年第一三八號普通恩給請求ノ訴狀ニ就キ審査シ裁決スルコト左ノ如シ

主文　本訴ハ之ヲ却下ス

事實及理由　本訴ノ要旨ハ原告ハ元判事ナリシカ明治四十五年六月六日大審院ニ於テ詐欺及瀆職ノ罪ニ依リ懲役八年ニ處セラレ大正三年懲役六年ニ同四年十一月十日懲役四年ニ減刑セラレ輕罪ノ受刑者トナリシ處昭和三年十一月十日同勅令第二七一號復權令第一條ニ依リ復權シタルヲ以テ同四年一月十六日ヲ以テ被告ニ對シ普通恩給請求書ヲ提出シタルニ被告ハ同年二月十二日附ヲ以テ原告ノ請求ヲ排斥スル旨裁定シタルニヨリ該裁定ヲ取消シ原告ハ普通恩給ヲ受クルノ權利ヲ有スル旨ノ判決ヲ求ムト云フニアレトモ本件ノ如キ普通恩給ノ請求ニ對スル被告ノ裁定ニ不服ナル爲行政訴訟ヲ提起スルニハ恩給法第十三條ニヨリ被告ニ具申シ其ノ裁定ヲ經ヘキモノナルニ拘ラス原告カソノ手續ヲ履行セサルコトハ訴狀自體ニヨリ明ナルヲ以テ本訴ハ所謂適法ノ手續ニ

違反スルモノナルカ故ニ之ヲ却下スヘキモノトス

仍テ主文ノ如ク判決ス

昭和四年五月八日第三部

裁判長評定官　三宅德業
評定官　島村他三郎
評定官　村上恭一
評定官　龍山龜太郎
評定官　野澤文彥

◎行政上ノ處分ニ依リ恩給ニ關スル權利ヲ侵害セラレタルモノハ一ヶ年内ニ行政訴訟ヲ提起スルヲ要スルニ拘ラス原告ハ北海道長官ノ右在職二年七ヶ月ヲ除算シテ算定シタル退隱料ノ算定ニ對シ行政訴訟ヲ提起セス從テ該裁定ハ既ニ確定シタリ（大正十五年九八號）

第十四條　内閣總理大臣及内閣恩給局長ノ裁決ハ關係官廳ヲ覊束ス

第十五條　内閣總理大臣第十三條第二項ノ訴願ノ裁決ヲ爲ス場合ニ於テハ恩給審査會ニ諮問スヘシ

恩給審査會ニ關スル規程ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

◎第十四條ハ裁判ノ效力第十五條ハ恩給審査會ノ規定第十六條ハ恩給ノ負担ニ關シ第十七條ハ分担請求第十八條ハ團體ヨリノ納金及交付金ニ關スル規定ナリ

教育者ニ直接必要ナキヲ以テ條文省略

以下教育者ニ直接必要ナキ條文ハ省略ス

第十九條　本法ニ於テ公務退トハ文官、軍人、教育職員及警察監獄職員竝第二十四條ニ掲クル待遇職員ヲ謂フ

本法ニ於テ公務員ニ準スヘキ者トハ準文官、準軍人及準教育職員ヲ謂フ

◎公務員及準公務員ノ意義ヲ明カニシタル規定ナリ

第二十條ハ文官準文官ノ意義

條文省略

◎第二十一條ハ軍人準軍人ノ意義ヲ規定シタルモノナリ

條文省略

第二十二條　教育職員トハ左ニ掲クル者ヲ謂フ

一　公立ノ學校若ハ圖書館又ハ在外指定學校ノ職員ニシテ國庫ヨリ俸給ヲ給セサル官ニ在ルモノ及判任官以上ノ待遇ヲ受クルモノ

二　府縣立師範學校長

前項ノ在外指定學校トハ在外國本邦人ノ爲ニ設置シタル學校ニシテ勅令ノ定ムル所ニ依リ政府ノ指定シタルモノヲ謂フ準教育職員トハ官立又ハ公立ノ學校ノ職員ニシテ勅令ヲ以テ指定スルモノヲ謂フ

◎教育職員及準教育職員ノ意義ヲ明ニシタル規定ナリ

◎準教育職員ノ意義

准教育職員トハ教授心得、助教授心得、教諭心得、助教諭心得、準訓導及判任

官ノ待遇ヲ受ケサル保姆ニシテ專任教員タルモノヲ謂フ(施行令第九條)

◎臺灣公立實業學校教諭ハ教育職員ニ非スシテ教育文官トシテ取リ扱ハル

◎第二十三條ハ警察監獄職員ノ意義第二十四條ハ待遇職員ノ意義第二十五條第二十六條ハ就職退職ノ意義第二十七條ハ准公務員ノ就職退職ノ意義ヲ規定シタルモノナリ(條文省略)

◎恩給法上ノ就職又ハ退職ノ日トハ何時ナリヤ

恩給法上就職又ハ退職ノ日トハ何時ヲ指スモノナリヤ多少疑アレトモ辭令ノ日附ノ日ヲ以テ就職又ハ退職ノ日トシテ實際上取扱ハル(恩給局恩給法總覽同)

注意　退職ノ効力發生時期トハ異ルモノトス

第二十八條　公務員ノ在職年ハ就職ノ月ヨリ之ヲ起算シ退職又ハ死亡ノ月ヲ以テ終ル

退職シタル後再就職シタルトキハ前後ノ在職年月數ハ之ヲ合算ス但シ一時恩給ノ基礎ト爲ルヘキ在職年ニ付テハ前ニ一時恩給ノ基礎ト爲リタル在職年ノ年月數ハ之ヲ合算セス退職シタル月ニ於テ再就職シタルトキハ再就職ノ在職年ハ再就職ノ月ノ翌月ヨリ之ヲ起算ス

◎本條ハ在職年計算ノ原則ヲ規定シタルモノニシテ公務員ノ在職年ハ就職ノ月ヨリ之ヲ起算シ退職又ハ死亡ノ月ヲ以テ終ルモノトス

而シテ再就職ノ場合ノ在職年計算方法ハ普通恩給ヲ受クルモノ再就職シタル場合ト未タ普通恩給ヲ受ケサル者再就職シタル場合トヲ問ハス何レモ原則トシテ前後ノ在職年月數ハ合算スルモノトス但シ後ノ在職カ一時恩給ノ基礎トナリタルニ過キサル場合ハ前ノ在職年カ亦一時恩給ノ基礎ニスキサルトキ之ヲ合算セス後ノ在職年ニ就テノミ一時恩給ヲ給ス而シテ後ノ在職年カ普通恩給ノ基礎トナリタルトキハ前ノ在職年カ一時恩給ノ基礎トナリタルニ過キサル場合ニテモ合算スルモノトス

例

一時恩給(前)　普通恩給(後)　合算ス
普通恩給(同)　一時恩給(同)　合算ス
一時恩給(同)　一時恩給(同)　合算セス
普通恩給(同)　普通恩給(同)　合算ス

◎兼任ノ在職年數ハ恩給ノ在職年計算上通算セス(大正十四年裁定)

◎自已ノ便宜ニヨリ文官ヲ退メタルタメ恩給資格ヲ失フトキハ前ノ勤續年數ノ利益ヲモ喪失スルモノナリヤ

原告ハ年齢未タ六十歳ニ至ラスシテ自己ノ便宜ニヨリ文官ヲ退キタルタナ官吏恩給法第十三條第一項ニヨリ恩給資格ヲ失フトキト雖モ前ニ軍人トシテ服役シタル年數ノ利益ハ之ヲ喪失スルモノニ非スト主張ストモソノ利益ヲモ共ニ失フモノナルコトハ大正元年第十六十七號事件

ニ付當裁判所ノ判示シタル所ノ如シ然ラハ當事者間ニ爭ナキ原告ノ文官滿十六年七月ヨリ原告カ明治四十一年二月六日自已ノ便宜ニヨリ文官ヲ退キタル以前ノ軍人文官年ハ十五年未滿ナルヲ以テ原告ハ恩給ヲ受クルノ權利ヲ有セサルモノトス(昭和二年七月二日大正十五年第二百二十二號行政裁判所判決)

◎勤務年數ノ計算ニ端數ノ取扱方

巡査看守退隱料及遺族扶助料法ニヨル勤續年數計算ニ付テハ十二箇月未滿ノ端數ハ之ヲ算入セサルモノトス(大正十四年第一二五號行政裁判所判決)

◎前在職ニ對シ一時恩給ヲ受ケ得ヘカリシニ實際之ヲ受ケサルトキハ前在職年月數ハ後ノ在職年ニ通算スヘキモノナリヤ

第二十八條第二項ニヨリ退職シタルモノ再就職シタルトキハ前後ノ在職年月數ハ之ヲ合算スルヲ原則トスレトモ一時恩給ノ基礎トナルヘキ在職年ニ付テハ前ニ一時恩給ノ基礎トナリタル在職年ノ年月數ハ假令實際一時恩給ヲ受ケタルト否トヲ問ハス之ヲ合算セサルモノトス

◎一年未滿ノ切レ切レノ在職年ハ後ニ一時恩給ノ基礎トナルコトヲ得ルヤ

恩給法施行後ノ在職年ニ付一時恩給ヲ給スル場合ハ第二十八條第二項ノ趣旨ニヨリ通算ヲ認メサル趣旨ト解スヘキカ故ニ一年未滿ノ切レ切レノ在職年ハ後ニ一時恩給ノ基礎トナスヘキモノニ非スト解ス(恩給局恩給法總覽四四)

◎第二十五條ハ二以上ノ官職ヲ併有スル場合ノ在職年ノ計算第三十條ハ軍人ノ恩給ニ關スル特則第三十一條ハ警察監獄職員ノ恩給ニ關スル特則第三十二條ハ從軍加算第三十三條第三十四條ハ戰亂戒嚴ノ加算第三十五條ハ外國鎮戍加算第三十六條航空加算第三十七條潛水加算第三十八條不建康業邊陬加算第三十九條航海加算第四十條加算年算入方法ノ

規定ナリ（條文省略）

第四十一條　左ニ掲クル年月數ハ在職年ヨリ之ヲ除算ス

一　普通恩給又ハ增加恩給ヲ受クルノ權利消滅シタル場合ニ於テ其ノ恩給權ノ基礎ト爲リタル在職年

二　五十一條ノ規定ニ依リ公務員カ恩給ヲ受クルノ資格ヲ失ヒタル在職年

三　在職中六年未滿ノ懲役又ハ禁錮ノ刑ニ處セラレタル場合ニ於テハ其ノ月ヨリ刑ノ執行ヲ終リ又ハ執行ヲ受クルコトナキニ至リタル月迄ノ在職年月數但シ刑ノ執行猶豫ノ言渡ヲ受ケタル者ニ付テハ此ノ限ニ在ラス其ノ言渡ヲ取消サレタルトキハ取消ノ月ヨリ刑ノ執行ヲ終リ又ハ執行ヲ受クルコトナキニ至リタル月迄ノ在職年月數

四　公務員ノ不法ニ其ノ職務ヲ離レタル月ヨリ職務ニ復シタル月迄ノ在職年月數

五　宮內職員トシテノ在職年月數ニシテ宮內官ノ恩給規程ニ依リ除算セラルヘキモノ

◎本條ハ除算年ヲ規定シタモノニテ除算年トス公務員ノ在職年中ノ或部分ヲ法律ノ規定ニ依テ在職年ヨリ除カルルコトナリ

教育職員ノ除算年ハ恩給法施行日タル大正十二年十月一日以降ノモノハ新恩給法ニヨリ其レ以前ノモノハ舊法ニ依ル從テ新舊双方トモ研究ノ必要アリ

（一）新法ノ除算年ハ次ノ如シ

一、普通恩給又ハ增加恩給ヲ受クル權利消滅シタル場合ニ於テ其ノ恩給權ノ基礎トナリタル在職年例ハ六年以上ノ懲役若ハ禁錮、時效ノ完成等

二、恩給法第五十一條ノ規定ニヨリ恩給ヲ受クル資格ヲ失ヒタル在職年

例ハ懲戒懲罰免狀褫奪ニヨル退職シタルトキ

三、三ハ教育職員ニ適用ナシ

四、公務員ノ不法ニ其ノ職務ヲ離レタル月ヨリ職務ニ服シタル月迄ノ在職年月數

五、宮內職員トシテ在職年月數ニシテ宮內官ノ恩給規定ニヨリ除算セラルヘキモノ

(二) 舊法ノ除算年ハ次ノ如シ

一、自己ノ便宜ニヨリ退職シタルモノ又ハ免職ニ處セラレ若ハ失職ニ該當シタル者再就職シタルトキハソノ前在職ノ年數月數

新法ニテハ自己便宜ノ退官退職ヲ失格原因トセス大ナル差異アルヲ以テ注意ヲ要ス

失職トハ免許狀ノ褫奪、失效、禁錮以上ノ刑ノ確定判決等ナリ

二、恩給若クハ退隱料ヲ受クヘキ職ニ在ルモノニシテ市町村立小學校正教員府縣立師範學校及公立中學校長正教員舍監書記ヲ兼ヌルトキハ其ノ兼職中ノ年數及月數

三、在外指定學校ノ職員ニ關スル特則

イ、服務上ノ義務ニ違反シ若クハ服務ヲ怠リ又ハ體面ヲ汚辱スル行爲アリタルタメ其ノ職ヲ解カレタルトキ

ロ、教員免許狀褫奪ノ處分ヲ受ケタルトキ

ハ、信用又ハ風俗ヲ害スル罪ヲ犯シ罰金刑ニ處セラレタルトキ

ニ、破產又ハ家資分散ノ宣告ヲ受ケタルトキ

◎舊法ノ自己便宜ニ非スト認メラレタル實例

病氣ノタメノ免職

六十歲ヲ超ヘタル後ノ退職

廢校

學校編制ノ變更ニヨリ過員ヲ生シタル退職

休職滿期ニヨル退職
病氣ノタメノ依願免職
軍人トシテ召集セラレタルニヨル依願退職
議員市町村長助役收入役等ニナリタルタメノ依願退職
教員養成ヲ目的トスル學校ニ入學ノタメノ依願退職
諭旨ニヨル退職等

◎恩給ノ支給ヲ受ケサル兼務ノ在職年ハ之ヲ通算スヘキモノナリヤ

俸給ノ支給ヲ受ケサル兼務ト雖モソノ公務員トシテノ在職年タルコトニ俸給ヲ受ケタル場合ト何等異ルヘキ理由ナキモ俸給ヲ受ケサルモノニ對シテハ恩給ヲ給與セサル趣旨ナリト解スヘキカ故ニ此ノ俸給ノ支給ヲ受ケサル兼務ノ在職年ハ恩給法上通算シ得サルモノトス

◎公立學校書記無給ノ期間ハ恩給法上ノ在職年數計算ニ通算スヘキモノナリヤ

前ノ場合ト同一理由ニヨリ恩給法上ソノ在職年數計算ニ算入スルヲ得サルモノトス(恩給局恩給法總覽六三)

◎教員養生ヲ目的トスル學校ニ入學シタル者中途退校シタルトキハ恩給法上如何ニ取扱フヘキカ

小學校令施行規則第百二十七條ニヨリ教員養生ヲ目的トスル學校ニ入學シ後自已便宜ニヨリ退校シタルモノハ恩給法上小學校訓導ヲ自己便宜退職シタルモノトシテ取扱フヘキカ妥當ナリ(同上)

第四十二條　左ニ掲クル年月數ハ之ヲ在職年ニ通算ス

一　宮內官ノ恩給規程ニ依リ宮內官恩給權ノ基礎ト爲ルヘキ宮內職員トシテノ在職年月數

二　準軍人ノ在職年月數

三　高等文官ノ試補又ハ判任官見習引續キ公務員ト爲リタルトキハ公務員トシテノ就職ニ接續スル其ノ勤續年月數ノ二分ノ一ニ相當スル年

月數

四　準教育職員引續キ教育職員ト爲リタルトキハ教育職員トシテノ就職ニ接續スル其ノ勤續年月數ノ二分ノ一ニ相當スル年月數

第二十八條、第二十九條及第三十一條ノ規定ハ前項ノ規定ニ依リ在職年ニ通算セラルヘキ年月數ノ計算ニ、第三十條ノ規定ハ前項第一號第三號又ハ第四號ノ規定ニ依リ在職年ニ通算セラルヘキ年月數ノ計算ニ付之ヲ準用ス

◎本條ハ通算年ヲ規定シタルモノナリ此ノ規定ノ內准教育職員ノ在職年數通算ノ部分ハ恩給法第九十九條ノ規定ニ依ツテ當分ノ間ソノ適用ナク從前ノ規定ニ從フヘキモノトス

◎准訓導カ正教員トナリテ退職シ恩給ヲ請求スルトキハ准訓導ノ勤續年數ノ二分ノ一ニ相當スル年月數ヲ通算スヘキモノナリキ

恩給法四十二條ノ規定ヨリ見ルトキハ當然准訓導ノ勤續年月數ノ二分ノ一ニ相當スル年月數ヲ通算スヘキモノト解スヘキカ如キモ恩給法九十九條ノ規定ニヨリ本條ハ制限セラレ當分ノ間ソノ適用ナキモノナルカ故ニ之ヲ通算シ得サルモノト解ス

◎四十三條ハ準公務員ノ在職年計算ニ關スル規定ナリ(條文省略)

第四十四條　本法ニ於テ俸給トハ本俸及之ニ準スヘキモノヲ謂フ本俸ニ準スヘキモノハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

公務員二以上ノ官職ヲ併有シ各官職ニ付俸給ヲ給セラルル場合ニ於テハ俸給額ヲ合算シタルモノヲ以テ其ノ者ノ俸給額トス

◎教育職員ト待遇職員トヲ併有スル者ハ退職ノ場合ニ二個ノ恩給ヲ併給セラルルヤ

恩給法ノ原則ヨリ見ルトキハ當然併給セサルヲ適當トスヘキモ恩給法九十九條ノ規定ニヨリ右原則ハ制限ヲ受ケ其ノ適用ヲ遮斷セラルルノ結果二個ノ恩給ハ併給セラルルモノトス

第四十五條　公務員所定ノ年數在職シ退職シタルトキハ之ニ普通恩給又ハ一時恩給ヲ給ス

◎普通恩給及一時恩給ノ要件ヲ規定シタルモノナリ

◎月手當支給中ノ在職期間ハ恩給法上在職年限ニ通算セラルルヤ

月手當ハ恩給法上俸給ト謂フ能ハサルヲ以テ在職年中ニ通算シ得サルモノトス

◎第四十六條ハ增加恩給ノ要件四十七條モ同四十八條公務傷病ノ規定四十九條同シク原因程度ニ關シ五十條有期裁定五十一條失格五十二條二重公務員ノ特則第五十三條同五十四條ハ再任改定ノ規定ナリ(條文省略)

◎軍人恩給ノ改定

軍人恩給法ニヨリ免除恩給ヲ受クル者カ再ヒ文官ニ就職シ在職十五年以上ニシテ恩給法施行後退職シタルトキハ其ノ恩給ハ同法五十四條第一項第一號及五十五條第一項ニ依リ改定セラルヘキモノニシテ二個ノ恩給ヲ併給セラルヘキモノニ非ス(大正十五年六十五號行政裁判所判決要旨)

◎五十五條ハ再任改定ノ在職年ノ計算、五十六條ハ再任改定ノ場合ニ於ケル恩給額五十七條ハソノ準用ニ關スル規定ナリ(條文省略)

第五十八條　普通恩給ハ之ヲ受クル者左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ其ノ間之ヲ停止ス

一　公務員又ハ第四十二條第一項第一號ニ規定スル宮內職員トシテ就職スルトキハ就職ノ月ノ翌月ヨリ退職ノ月迄但シ實在職期間一月未滿ナルトキ、軍人以外ノ公務員トシテ恩給ヲ受クル者陸軍若ハ海軍ノ兵卒トシテ就職スルトキ又ハ准士官以下ノ軍人若ハ准軍人トシテ恩給ヲ受クル者軍人以外ノ公務員トシテ就職スルトキハ此ノ限ニ在ラス

二　六年未滿ノ懲役又ハ禁錮ノ刑ニ處セラレタルトキハ其ノ月ノ翌月ヨリ其ノ執行ヲ終リ又ハ執行ヲ受クルコトナキニ至リタル月迄但シ刑

ノ執行猶豫ノ言渡ヲ受ケタルトキハ恩給ハ之ヲ停止セス其ノ言渡ヲ取消サレタルトキハ取消ノ月ノ翌月ヨリ刑ノ執行ヲ終リ又ハ執行ヲ受クルコトナキニ至リタル月迄之ヲ停止ス

前項第二號ノ規程ハ增加恩給ニ付之ヲ準用ス

◎本條ハ恩給權ノ停止ヲ規定シタルモノナリ

普通恩給ノ停止

1. 再就職ニ因ル停止
2. 犯罪ニ因ル停止

增加恩給ノ停止

1. 犯罪ニ依ル停止ノミ

◎教育職員ノ恩給停止ハ從前ノ例ニ依ル(舊法)

1. 公權ヲ停止セラレタルトキ
2. 學校職員退隱料受給者カ退隱料ニ付在官在職年數ヲ通算スルコトヲ得ル官職ニ付キ受クル給料ト退隱料トヲ合シタル額カ退職當時ニ於ケル給料額ヲ超過スルトキハ其ノ超過部分

例　退職當時ノ給料額年千五百圓

退隱料ノ額　五百圓

再就職ノ年給料　千二百圓トスレハ

1500円 − 1200円 = 300円

500円 − 300円 = 200円

二百圓タケ恩給ハ停止セラル

◎恩給停止ノ意義

原告ハ官吏恩給法第十二條第二項ノ規定ニ依リ恩給ヲ停止セラルルハ獨リ同法十七條ノ裁定ヲ受ケタルモノカ其ノ恩給ノ支給ヲ停止セラルルノミナラス恩給ヲ受クル權利ヲ有スルモノカ其ノ恩給ノ請求ヲナスコトモ亦停止セラルルモノナリト解シ從テ同法第十二條第二項一號ノ

規定ニ依リ恩給ノ請求ヲナスヲ得サルニ至リタル場合ニ於テハ同法第十六條ノ規定ノ適用ナク恩給ヲ受クルノ權利ハ消滅セサルモノナリト主張スト雖モ官吏恩給法十二條二項ニ所謂恩給ヲ停止ストハ恩給ノ支給ヲ停止スルノ謂ニシテ恩給ノ請求ヲ停止スル意味ヲ包含スルモノニ非ス故ニ同法十六條ノ七年ノ期間ハ同法十二條二項一號ニ該當スル場合即判任官以上ノ官ニ任セラレ政府ヨリ俸給ヲ受クルニ至リタル場合ト雖モ其ノ進行ヲ停止スルコトナク若シ該期間内ニ恩給ノ請求ヲ爲ササルトキハ其ノ權利ハ消滅スルモノナリ從テ原告カ明治三十八年四月十七日休職滿期ニヨリ退官シ一旦恩給ヲ受クヘキ權利發生シタルモ其ノ後七年間恩給ノ請求ヲ爲ササリシニ因リ其ノ權利ハ消滅シタルモノニシテ被告カ原告ノ普通恩給額ノ算出ニ付右明治三十八年四月十七日迄ノ在職年數ヲ算入スヘキモノニ非ストナシタルハ正當ナリ(大正十四年十二月一日行政裁判所判決)

◎第五十九條ハ公務員ノ納金、六十條ハ文官準文官ノ普通恩給、六十一條ハ軍人準軍人ノ普通恩給ニ關スル規定ナリ(條文省略)

第六十二條　教育職員在職年十五年以上ニシテ退職シタルトキハ之ニ普通恩給ヲ給ス

前項ノ普通恩給ノ年額ハ在職年十五年以上十六年未滿ニ對シ退職當時ノ俸給年額百五十分ノ五十ニ相當スル金額トシ十五年以上一年ヲ增ス毎ニ其一年ニ對シ退職當時ノ俸給年額ノ百五十分ノ一ニ相當スル金額ヲ加ヘタル金額トス

前項ノ場合ニ於テ其ノ在職年中ニ小學校、實業補習學校、幼稚園又ハ盲啞學校其ノ他ノ小學校ニ類スル各種學校ノ教育職員トシテノ勤續在職年十五年以上ノモノヲ含ムトキハ其ノ勤續在職年中十五年ヲ控除シタル殘ノ勤續在職年一年ニ付退職當時ノ俸給年額ノ百五十分ノ一ノ割合ヲ以テ之ニ加給ス

第一項ノ場合ニ於テ其ノ在職年中ニ中學校又ハ之ト同等以下ノ程度ノ學校ノ教育職員トシテノ勤續在職年十五年以上ノモノヲ含ムトキハ其ノ勤續在職年中十五年ヲ控除シタル殘ノ勤續在職年一年ニ付退職當時ノ俸給年額ノ三百分ノ一ノ割合ヲ以テ之ニ加給ス

前項ノ中學校ト同等以下ノ程度ノ學校ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第四十六條又ハ第五十四條第一項第二號若ハ第三號ノ規程ニ依リ在職年十五年未滿ノ者ニ給スヘキ普通恩給ノ年額ハ在職年十五年ノ者ニ給スヘキ普通恩給ノ額トス

第六十條第三項及第四項ノ規程ハ教育職員ニ付之ヲ準用ス第四十七條ノ規程ニ依リ准教育職員ニ給スヘキ普通恩給ノ年額ハ退職當時ノ俸給年額ノ百五十分ノ五十ニ相當スル金額トス

◎教育職員ノ普通恩給ノ金額算出方法

イ、在職年ノ年數

ロ、退職當時ノ俸給年額

以上ノ二ツニヨリ恩給年額ハ定マルモノトス

◎初等教員ノ恩給額算出方法

初等教員トハ小學校、實業補習學校、初稚園、盲啞學校等ノ教員ヲ謂フ

小學校教員二十年勤續シ退職當時ノ俸給年額二千圓トスレハ其ノ普通恩給ノ金額次ノ如シ

$$2000\times\left(\frac{50}{150}+\frac{5}{150}+\frac{5}{150}\right)=\text{恩給金額}$$

◎中等教員ノ恩給額算出方法

中等教員ニシテ二十一年勤續シ年俸三千圓ニテ退職スルモノノ恩給年額算出ノ方法ハ次ノ如シ

$$3000\times\left\{\frac{50}{150}+\frac{6}{150}+\frac{6}{300}\right\}=\text{普通恩給金額}$$

◎茲ニ注意スヘキハ初等教育者ハ初等教育者トシテ中等教員ハ中等教員トシテ各終始一貫シタル勤續者ノミ此ノ勤續加給ヲ給スルモノナル故

小學教員カ中等教員ニ轉任スルトキハ此ノ勤續加給ハ支給セラレサルモノトス此ノ掲續加給ト謂フハ在職十五年以上勤續シタル者ニ一年ヲ增ス毎ニ其ノ一年ニ對シ退職當時ノ俸給年額ノ百五十分ノ一ニ相當スル金額(初等教員)又ハ三百分ノ一(中等教員)ノ金額ヲ加給スルコトナリ

◎中等學校ト同等以下ノ程度ノ學校ノ意義

一、師範學校　二、高等女學校　三、專門學校令ニ依ラサル實業學校(實業補習學校ヲ除ク)　四、中學校又ハ前二號ニ揚クル學校ニ準スヘキ學校　五、實業補習學校教員養生所　六、朝鮮又ハ臺灣ニ於ケル中學校又ハ一號乃至三號若クハ五號ニ掲クルモノニ準スヘキモノ　七、在外指定學校ニシテ中學校又ハ一號乃至三號ニ掲クル學校ニ準スヘキモノ

◎師範學校附屬小學校ノ職員ハ小學校ノ教育職員トシテ恩給ヲ請求シ得ルヤ

師範學校附屬小學校ノ職員ハ本條三項ノ所謂小學校ノ教育職員ニ非サルヲ以テ恩給法上別途ノ取扱ヲ受クルモノトス

◎兼職ハ恩給法上在職年トシテ加給セラルルヤ

加給ハ兼職トシテノ在職年ニハ一切ナササルモノトス從テ兼職ノ在職年ニハ加給ヲ爲ササルモノトス

◎休職中ノ在職年ハ恩給法上勤續在職年中ニ算入スルモノナリヤ

休職中ト雖モ當然勤續在職ト看做スヘキモノナルカ故ニ勤續在職中ニ算入セラルルモノトス

◎內地ノ小學校訓導カ休職中臺灣ノ公學校訓導ニ就職スルトキハ勤續トシテ加給セラルルヤ

臺灣ノ公學校訓導ハ本條三項ノ小學校ニ類スル各種學校ノ職員ナルコト明ナルヲ以テ此ノ場合ニハ恩給法上勤續トシテ加給セラルルモノニシテ全ク內地ノ小學校ニ就職シタルト異ルコトナシ

◎臺灣公學校訓導ハ恩給法上教育職員ナリヤ

本條三項ノ小學校ニ類スル各種學校ノ職員ニ相當スルヲ以テ恩給法上教育職員ナリ

◎韓國公立學校訓導ハ恩給法上教育職員ナリヤ

韓國官立學校訓導ハ明治四十五年法律第十一號ニ依リ恩給ヲ支給セラルルモノニシテ本條三項ニ列擧スル教育職員ト謂フヲ得サルモノトス

第六十三條　警察監獄職員在職年十年以上ニシテ退職シタルトキハ是ニ普通恩給ヲ給ス

前項ノ普通恩給ノ年額ハ在職年十年以上十一年未滿ニ對シ退職當時ノ俸給年額ノ百五十分ノ五十ニ相當スル金額トシ十年以上一年ヲ增ス每ニ其ノ一年ニ對シ退職當時ノ俸給年額ノ百五十分ノ一ニ相當スル金額ヲ加ヘタル金額トス

前項ノ場合ニ於テ其ノ在職中ニ警察監獄職員トシテノ勤續在職年十年以上ノモノヲ含ムトキハ其勤續在職年中十年ヲ控除シタル殘ノ勤續在職年一年ニ付退職當時ノ俸給年額ノ三百分ノ一ノ割合ヲ以テ之ニ加給ス

在職年四十年ヲ超ユル者ニ給スヘキ恩給年額ハ之ヲ在職年四十年トシテ計算ス

第一項ノ在職年ハ國務大臣トシテ退官スルモノニ付テハ國務大臣トシテノ在職年五年以上ナルヲ以テ足ル

第四十六條第五十四條第一項第二號若ハ第三號又ハ前項ノ規定ニ依リ在職年十五年未滿ノ者ニ給スヘキ普通恩給ノ年額ハ在職年十五年ノ者ニ給スヘキ普通恩給ノ額トス

四十七條ノ規定ニヨリ準文官ニ給スヘキ普通恩給ノ年額ハ退職當時ノ恩給年額ノ百五十分ノ五十ニ相當スル金額トス

◎一旦退職シタルモノ再就職シタル場合ハ前後ノ勤續在職年月數ハ恩給法上勤續在職年トシテ通算スヘキモノナリヤ

原告カ熊本縣巡査トシテノ在職年ヲ其ノ依願免職トナリタル後再就職

シタル福岡縣巡査トシテノ勤續在職年ヲ通算シタルモノヲ以テ恩給法六十三條三項ノ勤續在職年ト爲スヘキヤ否ヤハ恩給法六十三條三項ハ同條一項及二項ニ依リテ恩給ヲ給スル場合ニ於テ同法二十八條一項及二項ニヨリ計算シタル在職年中ニ勤續在職年十年以上ノモノヲ含ムトキハ通常給スル恩給額ノ外更ニ其ノ勤續在職年ニ付一定ノ加給ヲナスノ趣旨ナルコト同法六十條乃至六十四條ノ規定ニ徴シテ明ナリ而シテ同法二十八條一項ニ於テ在職年ハ就職ノ月ヨリ之ヲ起算シ退職又ハ死亡ノ月ヲ以テ終ルト規定シ同法施行令三十五條ニ於テ廢官廢職廢廳廢校又ハ官職名改定ノ際其ノ廢改ニ係ル官職ニ在ル者即日又ハ翌日他ノ官職ニ任セラレタルトキハ恩給法ノ適用ニ付テハ之ヲ勤續ト看做スト規定シタルニ由リ之ヲ觀レハ恩給法六十三條三項ニ所謂勤續在職年トハ就職以來引續キ在職シタル年月ノ謂ニシテ恩給法施行令三十五條ニ該當スル場合ノ外一旦退職シタル以前ノ勤續年月數ト再就職シタル以後ノ勤續在職年數トハ通算スヘキモノニ非スト解スルヲ相當トス

然レハ熊本縣巡査トシテノ在職年月數ヲ其ノ一旦退職シテ再就職シタル福岡縣巡査トシテノ在職年數ヲ通算スヘキモノニ非ス(昭和三年行政裁判所判決)

注意　恩給判決施行令三十五條

廢官、廢職、廢廳、廢校又ハ官職名改定ノ際其ノ廢改ニ係ル官職ニ在ル者即日又ハ翌日他ノ官職ニ任セラレタルトキハ恩給法ノ適用ニ付テハ之ヲ勤續ト看做ス

◎恩給請求ノ場合ニ在職年限ヲ誤算シタルトキノ救濟時期

恩給法施行前給與事由ノ生シタル小學校教員隱退料給與ノ裁定ニ於テ在職年ノ計算ニ關シ誤リアリトスルモ其ノ裁定確定シタル以上最早ヤ之ヲ爭フコトヲ得サルモノトス(大正十五年六月十七日行政裁判所判決

◎六十四條ハ待遇職員ノ普通恩給六十五條ハ增加恩給ノ額六十六條ハ傷

病賜金六十七條ハ文官ノ一時恩給六十八條ハ軍人ノ一時恩給ノ規定ナリ(條文省略)

第六十九條　教育職員在職年一年以上十五年未滿ニシテ退職シタルトキハ之ニ一時恩給ヲ給ス

前項ノ一時恩給ノ金額ハ退職當時ノ俸給月額ニ相當スル金額ニ在職年ノ年數ヲ乘シタル金額トス

◎教育職員ノ一時恩給ノ算出方法

在職一年以上十五年未滿ニテ退職シ他ノ種類ノ恩給ヲ受ケサルコトヲ要ス

在職十年三ケ月ノ小學校教員俸給八〇圓年功加俸五圓ニテ退職スルトセハソノ一時恩給ノ額ハ次ノ通リ

(80 + 5) × 10 = 一時恩給額

◎七十條ハ警察監獄職員ノ一時恩給七十一條ハ待遇職員ノ一時恩給ノ規定ナリ(條文省略)

◎七十二條ハ遺族ノ意義ヲ規定シタルモノナリ(條文省略)

◎婚姻屆ヲナササル妻ハ遺族扶助料ヲ受クルコトヲ得ルヤ

婚姻屆ヲナササル妻ハ民法上ノ妻ニ非ス又本法ニ於テモ民法ト異リタル解釋ヲナスヘキ理由ナキヲ以テ本法ノ妻ニモアラサルヲ以テ妻トシテノ遺族扶助料ヲ受クルコトヲ得サルモノトス

◎七十三條ハ扶助料ノ要件七十四條ハ子及夫ノ特別要件七十五條ハ扶助料年額七十六條ハ扶助料失格七十七條ハ扶助料ノ停止七十八條七十九條同八十條扶助料權ノ消滅八十一條ハ兄弟姉妹ノ一時扶助料(條文省略)

第八十二條　文官、教育職員若ハ待遇職員在職年一年以上十五年未滿ニシテ在職中死亡シ又ハ警察監獄職員在職年一年以上十(年未滿ニシテ在職中死亡シタル場合ニハ其ノ遺族ニ一時扶助料ヲ給ス

前項ノ一時扶助料ノ金額ハ公務員ノ死亡ノ當時ノ俸給月額ニ相當スル金

額ニ其ノ公務員ノ在職年ノ年數ヲ乘シタル金額トス

下士以上ノ軍人在職年一年以上十一年未滿ニシテ在職中死亡シタル場合ニハ其ノ遺族ニ一時扶助料ヲ給ス

前項ノ一時扶助料ノ金額ハ死亡者ノ階等及在職年ノ年數ニ依リ定メタル別表第四號表ノ金額トス

◎有夫ノ女教師死亡シタル場合ニ夫ハ一時扶助料ヲ請求シ得ルヤ

有夫ノ女教師死亡シタル場合ハ七十四條二項ニ夫カ該當スルヤ否ヤニ依ツテ一時扶助料ヲ請求シ得ルヤ否ヤハ定マルモノトス

◎夫タル小學校教師死亡シ其ノ後夫ノ家ヲ去リタル妻ハ一時扶助料ヲ請求シ得ルヤ

夫タル小學校教師死亡當時妻ハソノ家ニ在リタルヲ以テ其ノトキ既ニ一時扶助料請求權ハ發生シタルモノナル故其ノ後ソノ家ヲ去ルモ本條ニヨル一時扶助料請求權ハ存續シ失ハサルモノトス

◎八十三條ハ施行期日八十四條ハ廢止法令ヲ定メタルモノナリ(條文省略)

第八十五條　本法施行前給與事由ノ生シタル恩給、退隱料、遺族扶助料其ノ他之ニ準スヘキモノニ付テハ從前ノ規定ニ依ル

從前ノ規定ニ依ル恩給、退隱料、遺族扶助料其ノ他之ニ準スヘキモノハ之ヲ本法ニ決リ受ケ又ハ受クヘキ恩給ト看做ス

前項ノ場合ニ於テ從前ノ規定ニ依ル恩給、退隱料、遺族扶助料其ノ他之ニ準スヘキモノカ本法ニ依リ給與スル恩給ノ何レノ種類ニ屬スヘキカハ公務員及其ノ遺族ノ種類竝給與ノ事由ニ依リ之ヲ定ム

從前ノ規定ニ依ル恩給、退隱料、遺族扶助料其ノ他之ニ準スヘキモノニシテ本法ニ依ル恩給ニ該當セサルモノアルトキハ本法ニ依ル恩給中最近キ性質ヲ有スルモノニ依ル

◎新法施行前ニ給與事由ノ生シタル恩給退隱料遺族扶助料ニ付テハ新法ニヨルヘキカ舊法ニヨルヘキカヲ規定シタルモノニテ大正十二年九月

三十日迄ニ權利ノ發生シタル者ハ舊法ニヨリ本法施行前既ニ發生シタル恩給權ノ支給裁定請求等ノ手續ハ新法ニヨリ取扱ハシムルモノトス

◎恩給施行前ニ疾病ニカカリ恩給施行後退職シタルトキハ舊法ニヨラスシテ新法ニニヨルヘキモノトス

◎軍人恩給ヲ受クルモノ郡書記トナリ十五年以上勤續シタルトキハ恩給ノ併給ヲ生スルヤ

恩給法八十五條二項ニヨレハ從前ノ規定ニヨル恩給ハ(中略)之ヲ本法ニヨリ受ケ又ハ受クヘキ恩給ト看做ストアルカ故ニ原告ノ受ケタル免除恩給ハ同法ニヨリ受ケタル普通恩給ト看做スヘキモノトス然ルニ原告ハ其ノ後再ヒ同法ニ所謂文官タル郡書記ニ任セラレ同法施行後タル大正十三年二月二十九日在職十五年六ケ月ニシテ退職シタルカ故ニ同法五十四條一項一號及五十五條一項ニ依リ普通恩給ヲ改定スヘキモノニシテ二個ノ恩給ヲ併給スヘキモノニ非ス

原告ハ再度ノ在職年カ十五年未滿ナルニ於テハ同條ニヨリ改定スヘキモノナルモ其レカ十五年以上即チ獨立シテ恩給ノ給與事由トナリ得ル在職年ナルニ於テハ同條ノ適用ナク從テ二個ノ恩給ヲ併給スヘキモノナル旨主張スルモ五十四條一項一號ニハ單ニ再就職後在職一年以上ニシテ退職シタルトキトアリテ十五年未滿ノ場合ト十五年以上ノ場合トヲ區別セサルカ故ニ原告ノ主張ハ採用シ難シ之ヲ要スルニ本件ノ場合ニ於テハ恩給法五十四條一項一號及五十五條一項ニ依リ軍人トシテノ在職ニ對スル普通恩給ヲ改定スヘキモノニシテ右恩給以外ニ郡書記トシテノ在職ニ對スル恩給ヲ給與スヘキモノニ非ス(大正十五年七月一日行政裁判所判決)

◎恩給法施行前ニ給與事由發生シタル恩給ノ取扱方恩給法施行前ニ給與事由發生シタル者ノ恩給ニ付テハ其ノ在職年及俸給年額ハ付恩給法三十二條三十三條四十四條三項ヲ適用スヘキ限ニ非ス

◎八十六條ハ消滅時效ノ規定ヲ從前ノ恩給權ニ對スル適用八十七條從前恩給ノ殘額給與ニ關シ八十八條ハ從前ノ裁決八十九條ハ小學校教員恩給基金ノ處置ニ關シ規定シタルモノナリ(條文省略)

第九十條　本法施行前ノ在職ニ付在職年ヲ計算スル場合ハ從前ノ規定ニ依ル但シ本法施行ノ際現ニ在職スル者ニ付テハ其ノ在職ニ繼續スル在職ニ限リ本法施行前ノ在職ト雖加算年ニ關スル規定ヲ除クノ外本法ニ依リ其ノ在職年ヲ計算ス前項但書ノ場合ニ於テ從前ノ規定ニ依リ特ニ通算シ得ヘキコトヲ定メラレタル年月數アルトキハ前項但書ノ規定ニ拘ラス之ヲ在職年ニ通算ス

◎新法施行前ノ在職年ノ計算方法ヲ規定シタルモノニテ原則トシテ舊法ニヨルヘキモノトス然レトモ大正十二年十月一日現ニ公務員トシテ在職スル者ニ付テハ其ノ在職ニ繼續スル在職ニ限リ新法ニ依リ計算スルモノトス但シ加算年ニ關スル規定ヲ除クモノトス

繼續スル在職トハ實際上引續キ職ニ在ルコトヲ謂フ

◎歸休兵カ歸休ヲ命セラレタル即日巡査ヲ拜命シタル場合ハ恩給法九、十條ノ在職繼續トシテ前後ノ在職年ヲ通算シ得ルヤ

現役兵ニシテ歸休ヲ命セラレタル者ハ在營ノ義務當然ニ消滅シ歸休ノ月末日限リ給與ヲ止メラレ豫備役後備役ト全然同一ノ取扱ヲ受クルモノナルコトハ明ナルヲ以テ軍人恩給法十七條三號ノ現役ヲ離レタル日ノ中ニハ現役兵ニシテ服役年限滿了ニヨリテ除隊トナリタル日ノミナラス歸休ヲ命セラレ除隊トナリタル日ヲモ包含スルモノト解スルヲ相當トス從テ現役兵トシテ歸休ヲ命セラレタル即日巡査ヲ拜命シ恩給法施行ノ際現ニ巡査ニ在職セシモノハ恩給法九十條但書ニヨリテ其ノ現役兵ノ在職ハ巡査ノ在職ニ繼續スル關係ニ在ルモノト解スルヲ相當トス(昭和三年十一月二十八日三年百五十八號行政裁判所二部判決)

◎公務員在職中ニ教育職員ノ在職年介在スルトキハ九十九條ニヨリ教育

職員ノ年限ハ除算セラレ他ノ公務員ノ在職年ハ通算セラルルモノトス

◎文官ト待遇職員トヲ併有シタル者カ文官ヨリ他ノ文官ニ轉任シ同時ニ待遇職員ヲ辞任シタルトキハ其ノ待遇職員ハ後任ノ文官ニ對シテ恩給法九十條一項但書ニ規定セル繼續セル在職ノ關係ニ在ルモノト認ムルコトヲ得ルヤ

原告カ待遇職員タル山口縣阿武郡産業技手ニ在職中同郡技手ニ併任シ後大正九年十二月二十六日郡技手ヨリ同郡書記ニ轉任シ同時ニ産業技手ヲ辭任シ更ニ大正十二年十月十二日ニ至リ郡書記ヲ辭任シタルモノナルコトハ當事者間ニ爭ナキ所ナリ

而シテ斯ノ如ク文官タル郡技手ト待遇職員タル産業技手ト二個ノ官職ヲ併有シタルモノカ右文官タル郡技手ヨリ更ニ文官タル郡書記ニ轉任シタル場合ニ於テハ郡技手トシテノ在職ハ郡書記トシテノ在職ト共ニ同シク文官ノ在職トシテ前後一體ヲナシ從テ之ヲ恩給法九十條一

項但書ニ所謂本法施行ノ際ノ在職(即本件ニアリテハ郡書記トシテノ在職)ニ繼續スル在職ト認メ得ヘキコト蓋シ疑ナキ所トス

然ルニ前記待遇職員タル産業技手ノ職ハ原告カ右郡技手ヨリ郡書記ニ轉任スルト同時ニ之ヲ退職シタルモノナルモ其ノ退職ハ從職タル郡書記ノ就職ニ對シ偶々時間的ニ相接スト謂フニ過キスシテ之ト連續ノ關係ヲナスモノト認メ難キヲ以テ右産業技手ノ職ハ上掲恩給法九十條一項但書ノ規定スル同法施行當時ノ在職タル郡書記ノ在職ニ繼續スル在職ト謂フヲ得サルモノト解スルヲ相當トス然ラハ原告ノ産業技手トシテノ在職ハ之ヲ郡書記トシテノ在職ニ通算スルコトヲ得サルモノナルコト明白ニシテシカモ産業技手トシテノ在職ヲ除外シタル原告ノ文官在職年軍人服役年並從軍加算年ヲ通算スルモ滿十五年ニ達セサルコトハ當事者間ニ爭ナキ事實ナルニヨリ被告カ原告ノ普通恩給ノ請求ヲ排斥スル旨ノ裁決ヲナシタルハ正當ニシテ本訴ハ理由ナシ(大正十四年十

◎九十一條ハ殖民地加算ニ付九十二條ハ國境管理ノ加算九十三條ハ海軍警史ニ付九十四條ハ朝鮮巡査補ニ付九十六條ハ大正九年七月三十一日以前ノ休職若ハ待命者ニ關スル規定九十七條ハ退職後重症規定ニ付九十八條公務傷病推定現定ニ付キ規定シタルモノナリ(條文省略)

第九十九條　五十八條ノ規定ハ教育職員及教官其ノ他教育事務ニ從事スル文官ニ付テハ當分ノ內之ヲ適用セス其ノ退隱料又ハ恩給ノ停止ハ仍從前ノ例ニ依ル但シ教育職員及教官其ノ他教育事務ニ從事スル文官學習院ノ職員ト爲リタルトキハ此ノ限ニ在ラス

前項ノ規定ノ施行セラルル期間內ニ屬スル教育職員ノ在職年ト教官其ノ他教育事務ニ從事スル文官以外ノ公務員ノ在職年トハ互ニ之ヲ通算セス仍從前ノ例ニ依ル教育職員ノ在職年ト四十二條一項各號ニ揭クル在職年トノ間ニ付亦同シ但シ學習院ノ職員トシテノ在職年ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

一項ノ規定ノ施行セラルル期間內ニ文官ヨリ教育職員又ハ教官其ノ他教育事務ニ從事スル文官ニ轉任シタル者失格原因ナクシテ退職シ年金タル恩給ヲ受ケサル場合ニ於テハ文官ノ在職年數ニ應シ之ニ一時恩給ヲ給ス教育職員ヨリ文官ニ轉シタル者教官其ノ他教育事務ニ彼事スル文官以外ノ文官トシテ失格原因ナクシテ退職シタルトキハ教官其ノ他教育事務ニ從事スル文官トシテノ在職最終ノ俸給額ニ基キ之ニ恩給ヲ給ス

◎新恩給法ハ總テノ公務員ハ如何ナル種類ノ公務員タルヲ問ハス其ノ在職年ハ之ヲ合算スヘキカ原則ナレトモ本條ニヨリ合算スヘキ範圍ハ教育職員ニ限リ制限セラレ即教育職員ハ從來ノ規定ニテ通算ヲ認メラレタルモノニ限リ通算セラレ然ラサルモノハ通算ヲ認メラレサルモノトス

即教官及教育事務ニ從事スル文官及學習院職員ヲ除ク他ノ公務員トハ

相互ニ通算ヲ許サレサルモノトス

◎教育職員ノ在職年ノ特別規定

一、教育職員ノ在職年ト教育其ノ他教育事務ニ從事スル文官並ニ學習院職員トノ在職年トノ間ハ互ニ通算ス其ノ他ハ通算セス

二、教育職員ノ在職年ト四十二條一項各號ニ掲ケタル在職年モ通算セス

注意　恩給法四十二條一項四號

準教育職員引續キ教育職員トナリタル注キハ教育職員トシテノ就職ニ接續スル其ノ勤續年月數ノ二分ノ一ニ相當スル年月數

◎小學教員ノ在職年計算方法

正教員ノ在職年數ハ就職ノ月ヨリ起算シ退職ノ月ヲ以テ止ムモノトス而シテ休職中ノ年數月數及明治十四年六月以後市町村立小學校訓導ノ職ニアリタル年數月數ハ正教員在職年ニ算入スルモノトス

注意　前後ノ在職年ヲ合算スルニアタリ注意スヘキハ前ノ退職ニヨリ退

隱料權ヲ生シタルトキニ其ノ退隱料權ノ基礎トナリタル在職年ノ內一年未滿ノ端數ハ切リ捨テ後ノ在職年ニ算入セサルコトトス(新法ハ異ル)但シ先キノ退職ニヨリテハ退隱料權發生セスシテ後ノ退職ニ依ツテ初メテ退隱料請求權カ發生シタル場合ハ前後ノ在職年ノ端月數ハ合算スルモノトス

又後ノ退職ニヨリテモ尙退隱料請求權ヲ生セサルトキハ後ノ在職年ノ年數ノミニテ退職給與金ヲ受クルモノトス

◎文官恩給ヲ受クルモノ教育文官ニ再就職スルトキハ恩給ハ停止セラルルヤ

文官恩給ヲ受クルモノ教育文官ニ再就職スルトキハ當然恩給ハ停止セラルルモノトス(大正十四年示三五三號)

◎文官恩給ヲ受クルモノ教育職員ニ再就職シタル場合ハ恩給ハ停止セラルルヤ

文官恩給ヲ受クルモノ教育職員ニ再就職シタル場合ハ本條ノ規定ニヨリ停止セラレサルモノトス(同上)

◎小學校訓導郡視學等ヲ勤續シ恩給ヲ教育文官トシテ支給セラルルモノ其ノ後非教育文官ニ就職スルトキハ恩給ハ停止セラルルヤ

此ノ場合モ本條ニヨリ從前通リ停止セラレサルモノト解ス

◎教育職員ノ普通恩給ヲ有スルモノ非教育文官ニ就職シタルトキハ恩給ハ停止セラルルヤ

前ト同

◎教育職員ノ普通恩給ヲ有スルモノ刑務所ノ教誨師ニ任セラルルトキハ恩給ハ停止セラルルヤ

本條ニヨリ恩給ハ停止セラレス又更ニ所定ノ年數教誨師トシテ在職スルトキハ別ニ恩給ヲ支給セラルルモノトス(大正十四年岡崎少年刑務所發五九一)

◎小學校訓導恩給施行前ニ縣屬トシテ教育課ニ轉任シタルモノ恩給施行後退職シタルトキハ恩給請求ハ如何ニスヘキカ

此ノ場合ノ恩給ハ小學校訓導及縣屬ノ全在職年ヲ通算シテ請求シ得ルモノトス

◎教育職員ト待遇職員ト併任ノ者退職セハ二個ノ恩給ヲ請求シ得ルヤ

教育職員ト待遇職員ト併任スルモノノ退職シタルトキハ本條ニヨリ二個ノ恩給ヲ請求シ得ヘシ

◎恩給法施行前ニ小學校訓導在職中ニ學校改廢ノタメ履歴書ノ上ヨリ見ルトキハ退職ト認メラルルモ事實上教職ニ從事シタルコト立證セラルル場合ニハ恩給法上勤續者トシテ恩給ヲ支給スヘキカ

退職シタルコトアリヤ否ヤハ事實上ノ問題ナル故事實上教職ニ從事シタルコトヲ立證セラルルニ於テハ當然恩給法ノ精神ニ則リテ勤續在職者トシテ恩給ヲ支給スヘキモノト解ス

◎中學校教諭及農學校長等ヲ十五年以上勤續シ恩給施行後退職シタルモノ一方縣ノ技師トシテ十五年以上勤續シタルトキハ文官恩給ノ外ニ教育職員ノ恩給ヲ併給セラルルヤ

此ノ場合ニ教諭トシテ俸給ヲ受ケサルトキハ恩給併給ノ問題ヲ生セス然レトモ教諭トシテ俸給ヲ受ケタリトセハ縣ノ技師トシテ恩給ヲ受ケ更ニ教育職員トシテノ恩給ヲ受クルコトヲ得ヘキナリ

◎九十九條ノ教育事務ニ從事スル文官ノ意義

左ニ掲クルモノヲ謂フ

一、官立ノ學校又ハ圖書館ノ職員

二、文部省官吏

三、教育事務從事ノ北海道廳府縣郡島廳朝鮮總督府朝鮮總督府道府郡島臺灣總督府臺灣總督府洲廳郡市樺太廳又ハ南洋廳ノ官吏

四、臺灣公立學校職員ニシテ國庫ヨリ俸給ヲ受クルモノ

五、教育事務從事ノ統監府又ハ關東郡都督府ノ官吏

◎第百條ハ從前ノ恩給ニ基ク扶助料ノ轉給ヲ規定シタルモノナリ

第百一條　本法施行ノ際現ニ從前ノ規定ニ依リ年金タル恩給、退隱料、遺族扶助料其ノ他之ニ準スヘキモノヲ受ケ又ハ受クヘキ者ニシテ本法所定ノ恩給又ハ扶助料ノ金額ヲ受ケサルモノニハ當該金額ニ其ノ金額ト本法所定ノ各相當恩給又ハ扶助料ノ金額トノ差額ヲ勅令ノ定ムル所ニ依リ增給ス

◎恩給金額增額ノ標準

恩給法百一條ニ依ル增給ハ從前ノ規定ニ依リ受ケ又ハ受クヘキ年金タル恩給退隱料等ノ金額ヲ勅令ノ定ムル所ニヨリ一定ノ金額ニ增額スルニ止マリ最初ノ裁定ノ基礎トナリタル在職年及俸給年額ヲ新ニ算定シ以テ其ノ金額ヲ增額スヘキモノニ非ス

◎小學校訓導トシテ十五年以上勤續ノ後師範學校訓導ニ在職シ更ニ小學校長ニ轉任シ退職シタル者ハ第一次小學校教員在職年ニ付テノミ恩給

法六十二條三項ニ依ル勤續加給ヲ付サルヘキモノトス

◎恩給ノ增額更正

恩給法百一條ニハ本條施行ノ際現ニ從前ノ規定ニ依リ年金タル恩給退隱料(中略)ヲ受ケ又ハ受クヘキ者ニシテ本法所定ノ恩給又ハ扶助料ノ金額ヲ受ケサル者ニハ當該金額ニ其ノ金額ト本法所定ノ各相當恩給又ハ扶助料ノ金額トノ差額ヲ勅令ノ定ムル所ニヨリ增給ストアリテ同法ニヨル增給ハ從前ノ規定ニヨリ受ケ又ハ受クヘキ年金タル恩給退隱料等ノ金額ヲ勅令ノ定ムル所ニ依リ一定ノ金所ニ增額スルニ止マリ最初ノ裁定ノ基礎トナリタル在職年及俸給年額ヲ新ニ算定シ以テソノ金額ヲ增額スヘキモノニ非スト解スルヲ相當トス

原告ハ最初ノ裁定ノ基礎ニ錯誤アリシヲ以テ新法ノ最モ近キモノニ依リ之カ更正ヲ爲スヘキモノナリト云フモ本件ノ如キ恩給施行前既ニ確定セル裁定ニ關シテハ其ノ當否ヲ爭フコトヲ得サルモノナルカ故ニ原

告ノ主張ハ失當ナリ

假ニ原告主張ノ如ク本件增給ニアタリ新ニ在職年及俸給年額ヲ算定スヘキモノトスルモ右算定ハ恩給法八十五條一項ニ依リ從前ノ規定タル巡査看守退隱料及遺族扶助料法並ニ關係法令ニ依ルヘキモノナルヲ以テ原告ノ在職年及俸給年額ニ付同法三十二條又ハ三十三條及四十四條三項ヲ適用スヘキ限ニ非ス

原告ハ前示八十五條一項ハ同法施行當時手續未濟ノ者ニ適用スヘキ規定ニシテ原告ノ如キモノニ適用スヘキモノニ非スト云フモ同項ニハ單ニ本法施行前給與事由ノ生シタル恩給退隱料云云トアリテ同法施行當時手續未濟ナルト既ニ裁定アリタルトヲ問ハサルカ故ニ原告ノ此ノ所論ハ採用スルヲ得ス

原告ハ假ニ本件ニ付同法三十二條又ハ三十三條及四十四條ノ適用ナシトスルモ原告ハ韓國政府傭聘中モ日本政府ヨリ俸給ノ支給ヲ受ケタル

ヲ以テ明治三十九年六月二十五日ヨリ同四十三年八月二十八日ニ至ル實在職四年二月十日ニ對シ同四十年法律第四十九號ニ依リ其ノ一月ニ付半月ノ加算ヲナサザルハ違法ナリト主張スルモ同年勅令百八十九號ニ依レハ前示法律ハ政府ヨリ俸給ヲ受ケサル巡査ニ之ヲ適用セストアリ同三十七年勅令二百三十七號ニ依レハ官吏ノ待遇ヲ受クル在職者ニシテ許可ヲ得テ外國政府ニ聘セラレタル者ハ其ノ傭聘中俸給ヲ停止スル旨規定シアリ而モ原告ハ韓國政府傭聘中政府ヨリ俸給ヲ受ケタルコトニ付キ何等ノ立證ヲ爲サス又同四十三年七月一日ヨリ同年八月二十八日ニ至ル間其ノ支給ヲ受ケサリシコトハ其ノ爭ハサル所ナルヲ以テ同三十九年六月二十五日ヨリ同四十三年八月二十八日ニ至ル期間中政府ヨリ俸給ノ支給ヲ受ケタルハ二箇年未滿ナルヲ以テ右期間ニ對シ示法律四十九號ニ依ル加算ヲ爲スヘキモノニ非ス從テ原告ノ此ノ點ニ關スル主張モ理由ナシ

原告ハ假ニ被告裁決ノ在職年及俸給年額ニヨルモ一年未滿ノ端數ヲモ計算スヘキモノナルヲ以テ其ノ恩給金額ハ金二百十一圓ニシテ金二百九圓ニ非スト云フモ恩給法八十五條一項ニヨレハ本法施行前ニ給與事由ノ生シタル恩給退隱料(中略)ニ付テハ從前ノ規定ニヨルトアリ而モ巡査看守退隱料及遺族扶助料法十七條一項ニヨレハ巡査ノ勤續年數ハ就職ノ月ヨリ起算シ退職ノ月ヲ以テ終ル但シ十二ヶ月未滿ノ端數ハ之ヲ算入セストアルカ故ニ原告ノ此ノ者ニ關スル主張モ理由ナシ(大正十四年行政裁判所判決)

◎百二條ハ恩給ノ增額更正百三條ハ屯田兵ノ恩給ニ關スル特則百四條ハ施行令委任ノ規定ナリ(條文省略)

階等	將官及相當官				佐尉官及相當官				准士官		下士	
在職年數	高等				等				判任官			
	親任一等	一二等	一三等	一四等	一五等	一六等	一七等	一八等	一等	一二等	一三等	一四等
一年	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓
二年					五四二	三九二	二八二	二三三	二〇〇	一四三	一二八	一一五
三年				九八八	八一三	五八八	四二五	三五〇	三〇〇	二一四	一九一	一六九
四年			一、五三三	一、三一七	一、〇八三	七八四	五六七	四六七	四〇〇	二八五	二五五	二二五
五年		二、三三三	一、九一七	一、六四六	一、三五四	九八〇	七〇八	五八三	五〇〇	三五六	三一九	二八一
六年		三、二五〇	二、八〇〇	二、三〇〇	一、九七五	一、六二五	一、一七六	八五〇	七〇〇	四二八	三八三	三三八
七年	四、三七五	三、七九二	三、二六七	三、六八三	三、三〇四	一、八九六	一、三七二	九九二	八一七	四九九	四四六	三九四
八年	五、〇〇〇	四、三三三	三、七五三	三、〇六七	二、六三三	二、一六七	一、一三三	九三三	八〇〇	五七〇	五一〇	四五〇
九年	五、六二五	四、八七五	四、二〇〇	三、四五〇	二、九六三	二、四三八	一、七六四	一、二七五	一、〇五〇	九〇〇	六四一	五七四
十年	六、二五〇	五、四一七	四、六六七	三、八三三	三、二九二	二、七〇八	一、九六〇	一、四一七	一、一六七	一、〇〇〇	七一三	六三八

恩給法施行令

恩給法施行令

第一條　恩給法十條ノ規定ニ依リ恩給ノ支給ヲ受クヘキ遺族及其ノ順位ハ扶助料ヲ受クヘキ遺族及其ノ順位ニ依ル

同法十條ノ恩給權者カ死亡ノ當時家族ナリシトキハ其ノ相續人ハ恩給權者死亡ノ當時之ト同一戸籍內ニ在リタルコトヲ要ス

第二條　恩給法十條ノ場合ニ於テ死亡シタル恩給權者未タ恩給ノ請求ヲ爲サザリシトキハ恩給ノ支給ヲ受クヘキ遺族又ハ相續人ハ自己ノ名ヲ以テ死亡者ノ恩給ノ請求ヲ爲スコトヲ得

裁定ヲ經タル恩給ニ付テハ死亡者ノ遺族又ハ相續人ハ自己ノ名ヲ以テ其ノ恩給ノ支給ヲ受クルコトヲ得

第三條　恩給法十二條ノ規定ニ依リ內閣恩給局長以外ノ者ニ於テ恩給ヲ受

クルノ權利ヲ裁定スヘキ場合ハ左ノ區分ニ依ル

一　內地ニ於ケル公立ノ小學校、實業補習學校、幼稚園、盲啞學校其ノ他ノ小學校ニ類スル各種學校ノ教育職員及準教育職員並其ノ遺族ノ恩給ハ北海道ニ在リテハ北海道廳長官、府縣ニ在リテハ府縣知事之ヲ裁定ス

二　前號ニ掲クルモノヲ除クノ外內地ニ於ケル公立ノ學校又ハ圖書館ノ教育職員ニシテ文官ニ非サルモノノ一時恩給ハ北海道ニ在リテハ北海道廳長官、府縣ニ在リテハ府縣知事之ヲ裁定ス

三　朝鮮、臺灣又ハ樺太ニ於ケル公立ノ小學校、普通學校公學校、實業補習學校、幼稚園、盲啞學校其ノ他ノ小學校ニ類スル各種學校ノ教育職員及準教育職員並其ノ遺族ノ恩給ハ朝鮮ニ在リテハ道知事、臺灣ニ在リテハ州知事又ハ廳長、樺太ニ在リテハ樺太廳長官之ヲ裁定ス

四　朝鮮、臺灣、樺太、關東州(南滿洲鐵道附屬地ヲ含ム以下同シ)又ハ南洋群島ニ於テ國庫ヨリ俸給ヲ受クル警察監獄職員(陸海軍ニ屬スルモノ及樺

太ニ於ケル刑務所ニ屬スルモノヲ除ク)及其ノ遺族ノ恩給ハ朝鮮ニ在リテハ朝鮮總督(道ノ警部補、巡査及消防手並其ノ遺族ノ恩給ハ道知事)臺灣ニ在リテハ臺灣總督(州又ハ廳ノ警部補及巡査並其ノ遺族ノ恩給ハ州知事又ハ廳長)樺太ニアリテハ樺太廳長官、關東州ニ在リテハ關東長官、南洋群島ニ在リテハ南洋廳長官之ヲ裁定ス

五　內地ニ於テ國庫以外ノ者ヨリ俸給ヲ受クル警察監獄職員及其ノ遺族ノ恩給ハ北海道ニ在リテハ北海道廳長官、府縣ニ在リテハ府縣知事(警視廳部內ノ職員ニ在リテハ警視總監)之ヲ裁定ス

六　恩給法二十四條三號ニ掲クル待遇職員(國庫ヨリ俸給ヲ給スルモノヲ除ク)及其ノ遺族ノ恩給ハ北海道ニ在リテハ北海道廳長官、府縣ニ在リテハ府縣知事(警視廳部內ノ職員ニ在リテハ警視總監)朝鮮ニ在リテハ道知事、臺灣ニ在リテハ州知事又ハ廳長、關東州ニ在リテハ關東長官之ヲ裁定ス(大正十五年勅令三百四號ヲ以テ本號ヲ改正)

第四條　恩給法十七條一項ノ規定ニ依リ分擔スヘキ恩給ハ普通恩給及扶助料トシ國庫カ恩給金額ノ分擔ヲ請求スル場合ニ於テハ當該公務員ノ在職年中ニ恩給ノ負担者ヲ異ニスヘキ二種以上ノ公務員ノ在職年ヲ含ムトキハ各在職年ノ年數ヲ其ノ各官職ノ最終ノ俸給年額(下士以下ノ軍人及之ニ相當スル準軍人ニ付テハ別表第一號表ノ金額ヲ俸給年額ト看做ス)ニ乘シタル數ニ比例シテ分担請求額ヲ定ム

恩給法四十五條ノ規定ニ依リテ普通恩給ヲ受クヘキ所定ノ年數ニ滿タサル在職年ノ者ニ給スル普通恩給及其ノ遺族ニ給スル扶助料ニ付テハ當該所定ノ年數ニ滿タサル年月數ハ分担請求額計算上之ヲ當該恩給ノ負担者ニ歸スヘキ在職年ト看做ス

分担請求額ニ付在職年數ヲ計算スル場合ニ於テハ左ノ割合ニ依リ其ノ基礎タル在職年月數ニ加算ス

一　恩給法六十二條三項ノ規定ニ依リ加給スヘキ場合ニ於テハ加給セラルヘキ勤續在職年ノ一年ニ付一年

二　恩給法六十條三項、六十一條四項、六十二條七項、六十三條五項又ハ六十四條三項ノ規定ニ依リ外國勤續ニ因ル加給ヲ爲スヘキ場合及同法六十二條四項又ハ同法六十三條三項ノ規定ニ依リ加給ヲ爲スヘキ場合ニ於テハ加給セラルヘキ勤續在職年ノ一年ニ付六月

前三項ノ規定ハ恩給法十七條二項乃至四項ノ分担請求ニ付之ヲ準用ス

第五條　恩給ノ分担ハ支給義務額ニ依リ之ヲ爲スモノトス

第六條　左ニ掲クルモノハ國庫ヨリ俸給ヲ給セサルモ恩給法二十條ノ規定ノ適用ニ付之ヲ文官トス

一　地方官官制二條ニ規定スル府縣判任官(大正十五年勅令二百四十四號ヲ以テ本號ヲ改正)

二　都市計畫地方委員會ノ職員ニシテ官吏タルモノ

三　神宮司廳又ハ神宮皇學館ノ職員ニシテ官吏タルモノ

四　朝鮮道立醫院ノ職員ニシテ官吏タルモノ

第七條　恩給法二十一條二項二號ノ陸軍又ハ海軍ノ學生生徒トハ陸軍士官學校、陸軍幼年學校、陸軍戸山學校、陸軍工科學校、海軍兵學校、海軍機關學校及海軍經理學校ノ生徒、陸軍ノ士官候補生、海軍豫備生徒竝海軍豫備練習生ニシテ軍人ニ非サルモノヲ謂フ

第八條　恩給法二十二條二項ノ在外指定學校ハ外務大臣及文部大臣之ヲ指定ス但シ關東州ニ在リテハ關東長官之ヲ指定ス

前項ノ指定ニ關スル規定ハ外務大臣及文部大臣又ハ關東長官之ヲ定ム

第九條　恩給法二十二條三項ノ準教育職員トハ教授心得、助教授心得、教諭心得、助教授心得、準訓導及判任官ノ待遇ヲ受ケサル保姆ニシテ專任教員タルモノヲ謂フ

第十條　恩給法二十四條三項ノ待遇職員トハ左ニ掲クル者ヲ謂フ（大正十五年勅令三百四號ヲ以テ本條ヲ改正）

一　道路管理職員制ニ依ル職員
二　地方土木職員制ニ依ル職員
三　地方產業職員制ニ依ル職員（市費ヲ以テ置キタルモノヲ除ク）
四　地方測候所職員制ニ依ル職員
五　地方學校衞生職員制ニ依ル職員
六　地方社會教育職員制ニ依ル職員（同上本號ヲ追加）
七　地方社會事業職員制ニ依ル職員（同上本號ヲ追加）
八　防疫職員制ニ依ル職員
九　稅關官制第二十六條ノ規定ニ依ル職員
十　臨時海港檢疫所官制ニ依ル職員
十一　廳府縣衞生職員制ニ依ル職員
十二　癩療養所職員制ニ依ル職員
十三　家畜防疫職員制ニ依ル職員（同上本號ヲ追加）

十四　朝鮮地方待遇職員令ニ依ル地方ノ土木、産業、衛生又ハ測候ニ關スル事務又ハ技術ニ從事スル職員(府費ヲ以テ置キタルモノヲ除ク)

十五　臺灣地方待遇職員令ニ依ル地方ノ土木、衛生、産業又ハ物産檢査ノ事務又ハ技術ニ從事スル職員(市費ヲ以テ置キタルモノヲ除ク)

十六　關東州地方待遇職員令ニ依ル地方ノ産業、土木又ハ衛生ニ關スル事務又ハ技術ニ從事スル職員

第十一條　恩給法二十四條四號ノ待遇職員トハ左ニ掲クル者ヲ謂フ

一　造幣醫及專賣醫(昭和二年勅令三百六十二號ヲ以テ本號ヲ追加、一號ヲ二號トシ以下順次繰下ク)

二　陸軍ノ通譯ニシテ判任官以上ノ待遇ヲ受クルモノ

三　靖國神社附屬遊就館職員ニシテ判任官以上ノ待遇ヲ受クルモノ

四　鐵道醫

五　北海道廳事業手

六　朝鮮ニ於ケル監獄ノ藥劑師、鐵道醫及鐵道藥劑師並臺灣ニ於ケル警察醫(大正十五年勅令三百四號ヲ以テ本號ヲ改正)

七　臺灣又ハ關東州ニ於ケル檢疫員及檢疫醫員

第十二條　恩給法三十二條一項一號ノ規定ニ依リ從軍加算ヲ爲スヘキ場合ニ於テハ同法四十條二項ノ規定ニ依ルノ外左ノ各號ノ例ニ依ル

一　戰爭開始後戰地ニ到リタル者ニ付テハ戰地ニ到ルヘキ事由ノ生シタル當時所在スル地ノ屬スル地域ヲ離レタル月ヨリ加算ス

二　戰爭中戰地ヨリ歸還シタル者ニ付テハ其ノ歸還スヘキ地ノ屬スル地域ニ到著シタル月迄加算ス

前項ノ地域トハ內地、朝鮮、臺灣、樺太、關東州、南洋群島及之ニ準スヘキ外國ノ地區ヲ謂フ

恩給法三十二條一項二號ノ規定ニ依リ從軍加算ヲ爲スヘキ場合ニ於テハ同法四十條二項ノ規定ニ依ルノ外左ノ各號ノ例ニ依ル

一　動員(之ニ準スルモノヲ含ム)部隊ニ編入セラレタル者ニ付テハ編入ノ月動員(之ニ準スルモノヲ含ム)下令前ヨリ其ノ部隊ニ在リタル者ニ付テハ其ノ下令ノ月ヨリ加算ス

二　戰爭開始後戰務ニ服スヘキ地ニ到リタル者及戰爭中其ノ地ヨリ歸還シタル者ニ付テハ前二項ノ規定ヲ準用ス

前三項ノ規定ハ恩給法三十二條二項ノ規定ニ依ル加算ニ付之ヲ準用ス

第十三條　恩給法三十五條ノ規定ニ依リ鎭戍加算ヲ爲スヘキ場合ニ於テハ同法四十條二項ノ規定ニ依ルノ外公務員鎭戍ノ爲內國ヲ出發シタルトキハ內國ヲ離レタル月ヨリ加算シ鎭戍ノ終了後直ニ內國ニ歸還シタルトキハ內國歸著ノ月迄加算ス

第十四條　恩給法三十六條ノ規定ニ依リ航空加算ヲ爲スヘキ場合ニ於テハ左ノ區分ニ依ル

一　同月內ニ於テ飛行時數五時間以上飛行機ニ搭乘シ航空勤務ニ服シタルトキ又ハ航空機ニ搭乘シ特ニ危險ト認ムル航空試驗ニ從事シタルトキハ其ノ一月ニ付一月半

二　同月內ニ於テ飛行時數一時間以上飛行機ニ搭乘シ又ハ五時間以上航空船、航行中ノ艦船繫留ノ氣球若ハ自由氣球ニ搭乘シ航空勤務ニ服シタルトキハ其ノ一月ニ付一月

三　前二號ニ揭クルモノヲ除クノ外航空機ニ搭乘シ航空勤務ニ服シタルトキハ其ノ一月ニ付半月

第十五條　恩給法三十八條ノ規定ニ依リ加算スヘキ邊陬又ハ不健康ノ地域及其ノ加算ノ程度ハ別表二號表ニヨル

第十六條　邊陬又ハ不健康ノ地域ノ加算ハ在勤地外ノ地ヨリ其ノ在勤地ニ赴任シタル者ニ付テハ在勤地ニ到着シタル月ヨリ其ノ地ニ在リテ就職シタル者ニ付テハ就職ノ月ヨリ之ヲ起算シ其ノ在勤ヲ止メタル月ヲ以テ終ル

前項ノ地域ニ在勤中引續キ九十日以上其ノ地域ヲ離レタルトキハ全ク地域ヲ離レタル月ニ對シテハ邊陬又ハ不健康ノ地域ノ加算ヲ爲サス

第十七條　恩給法三十八條ノ規定ニヨル不健康業務ノ加算ハ一月ニ付半月トス其ノ業務左ノ如シ

一　有毒ノ瓦斯若ハ蒸氣、爆藥類又ハ危險ナル細菌ノ研究又ハ製造ニ直接ニ從事スル勤務ニシテ內閣總理大臣ノ指定スルモノ

二　排水量千噸以下ノ在役ノ驅逐艦若ハ掃海艇乘員トシテノ勤務又ハ鐵道事業ニ於ケル蒸汽機關車乘員トシテノ現業勤務

三　炭坑內切羽ニ於ケル連續的現業勤務

四　肺結核、喉頭結核又ハ癩ノ患者ヲ收容スル病室ニ於テ直接看護ニ從事スル勤務

前項ニ規定スル業務ニ從事中引續キ三十日以上服務セサルトキハ全ク服務セサル月ニ對シテ不健康ノ業務ノ加算ヲ爲サス

第十八條　恩給法三十九條ノ遠洋航海トハ北緯五十度以北、東經百六十度以東、東經百六十度北緯四十度ノ點ト東經百四十度北緯二十度ノ點トヲ連結スル線ノ以東以南北緯二十度以南及東經百十度以西ノ海面ヲ航行シ一航程千浬ヲ超ユル航海ヲ謂フ

第十九條　航海加算ハ初發港出發ヨリ之ニ歸著シ又ハ到達港ニ達スル迄ノ期間ニ對シ之ヲ爲ス但シ出發ニ當リ內國港灣ニシテ前條ノ海面ニ在ラサルモノヲ經由スル場合ニ於テハ其ノ港灣ヲ離レタル月ヨリ加算シ歸著ニ際シ內國港灣ニシテ前條ノ海面ニ在ラサルモノヲ經由スル場合ニ於テハ其ノ港灣ニ到著シタル月迄加算ス

航海中引續キ三十日以上航行セサルトキハ全ク航行セサル月ニ對シテハ航海加算ヲ爲サス

第二十條　恩給法四十四條ノ本俸ニ準スヘキモノトハ左ニ揭クルモノヲ謂フ

一　年功ニ因ル加俸
二　府縣知事ノ指定地加俸
三　官立又ハ公立ノ大學ノ教授又ハ助教授ノ職務俸
四　第一號ニ掲クルモノヲ除クノ外市町村立小學校教員加俸令ニ依ル加俸
五　警察監獄職員ノ精勤加俸及功勞加俸

第二十一條　恩給法四十八條一項一號ニ規定スル流行病及地域ハ別表三號表ニ依ル

第二十二條　恩給法四十八條一項二號ノ流行病ノ種類左ク如シ

一　マラリア(黑水熱ヲ含ム)
二　猩紅熱
三　コレラ
四　脚氣(戰地ニ限ル)

五　發疹チフス
六　腸チフス
七　パラチフス
八　ペスト
九　回歸熱
十　赤痢
十一　流行性腦脊髓膜炎
十二　流行性感冒
十三　肺ヂストマ病
十四　トリパノゾーム病
十五　ワイルス氏病
十六　カラアザール
十七　黃熱

第二十三條　恩給法四十九條二項ノ規定ニ從ル戰鬪ニ準スヘキ公務ニ因ル傷痍疾病トハ左ニ掲クルモノヲ謂フ

一　戰地ニ於テ勤務中敵ノ設置若ハ遺棄シタル危險物ニ因ル又ハ敵對行動中ノ不可抗力ニ因ル傷痍疾病

二　暴徒鎭壓又ハ集團ヲ爲ス馬賊海賊蕃人等討伐中ノ敵對行動ニ因ル又ハ敵對行動中ノ不可抗力ニ因ル傷痍疾病

三　外國ノ交戰若ハ擾亂ノ地域內ニ於テ勤務中又ハ該地域內ヲ職務ヲ以テ旅行中ニ於ケル該交戰又ハ擾亂ニ因ル傷痍疾病

四　航空機ニ乘シ航空勤務中又ハ潛水艦ニ乘シ潛航勤務中ノ不可抗力ニ因ル傷痍疾病

五　職務ヲ以テ兇賊又ハ脫獄囚ヲ逮捕スル、ニ當リ危害ヲ加ヘラルヘキコトヲ豫斷シ得ルニ拘ラス危險ヲ冒シテ其ノ職務ヲ執行シタル爲加ヘラレタル傷痍疾病

六　職務ヲ以テコレラ又ハペストノ防疫、診療又ハ看護ニ直接從事シ之カ爲罹リタル該疾病

第二十四條　恩給法四十九條二項ノ規定ニ依リ不具癈疾ノ程度ヲ分チテ左ノ七項トス

特別項症

一　常ニ就床ヲ要シ且複雜ナル介護ヲ要スルモノ

二　重大ナル精神障碍ノ爲常ニ監視又ハ複雜ナル介護ヲ要スルモノ

三　身體諸部ノ障碍ヲ綜合シテ其ノ程度一項症ニ一項症乃至六項症ヲ加ヘタルモノ

第一項症

一　複雜ナル介護ヲ要セサルモ常ニ就床ヲ要スルモノ

二　精神的又ハ身體的作業能力ヲ失ヒ僅ニ自用ヲ辨シ得ルニ過キサルモノ

三　咀嚼及言語ノ機能ヲ併セ廢シタルモノ

四　兩眼ノ視力カ視標○●一ヲ○●五メートル以上ニテハ辨別シ得サルモノ

五　肘關節以上ニテ兩上肢ヲ失ヒタルモノ

六　膝關節以上ニテ兩下肢ヲ失ヒタルモノ

第二項症

一　精神的又ハ身體的作業能力ノ大部ヲ失ヒタルモノ

二　咀嚼又ハ言語ノ機能ヲ廢シタルモノ

三　兩眼ノ視力カ視標○●一ヲ一メートル以上ニテハ辨別シ得サルモノ

四　兩耳全ク聾シタルモノ

五　腕關節以上ニテ兩上肢ヲ失ヒタルモノ

六　足關節以上ニテ兩下肢ヲ失ヒタルモノ

第三項症

一　咀嚼又ハ言語ノ機能ニ大ニ妨アルモノ

二　兩睾丸ヲ全ク失ヒタルモノ

三　肘關節以上ニテ一上肢ヲ失ヒタルモノ

四　膝關節以上ニテ一下肢ヲ失ヒタルモノ

五　兩耳ノ聽力カ耳殼ニ接セサレハ大聲ヲ解シ得サルモノ

第四項症

一　泌尿器ノ機能ニ大ニ妨アルモノ

二　兩眼ノ視力カ視標○●一ヲ二メートル以上ニテハ辨別シ得サルモノ

三　腕關節以上ニテ一上肢ヲ失ヒタルモノ

四　足關節以上ニテ一下肢ヲ失ヒタルモノ

第五項症

一　鼻ヲ失ヒ其ノ機能ニ大ニ妨アルモノ

二　頭部、顏面等ニ大ナル醜形ヲ殘シタルモノ

三　一眼ノ視力ヵ視標〇、一ヲ〇、五メートル以上ニテハ辨別シ得サルモノ

四　一側總指ヲ全ク失ヒタルモノ

第六項症

一　頸部又ハ軀幹ノ運動ニ大ニ妨アルモノ

二　一眼ノ視力ヵ視標〇、一ヲ一メートル以上ニテハ辨別シ得サルモノ

三　一側拇指及指示ヲ全ク失ヒタルモノ

四　一側總趾ヲ全ク失ヒタルモノ

前項ノ各症ニ該當セサル傷痍疾病ノ症項ハ前項ノ規定ニ準シ之ヲ査定ス

視力ヲ測定スル場合ニ於テハ屈折異常ノモノニ付テハ矯正視力ニ依リ視標ハ萬國共通視力標ニ依ル

第二十五條　准文官ノ公務傷病ニ關スル規定ノ適用ニ付テノ階等ハ左ノ區分ニ依ル

一　高等官ノ試補ハ判任官一等トシ判任官見習ハ同四等トス

二　國庫ヨリ俸給ヲ給セサル官ニ在ル者ニ付テハ其ノ官等等級ニ依ル

第二十六條　準軍人ノ公務傷病等ノ規定ノ適用ニ付テノ階等ハ左ノ區分ニ依ル

一　陸軍ノ見習士官及海軍ノ候補生ハ判任官一等トス

二　前號ニ掲ケサル陸軍ノ士官候補生、陸軍士官學校生徒、海軍兵學校生徒、海軍機關學校生徒、海軍經理學校生徒及海軍豫備生徒ハ判任官三等トス

三　前二號ニ掲ケサル陸海軍諸生徒及海軍豫備練習生ノ階等ハ兵卒ニ準ス

第二十七條　教育職員及準教育職員ノ公務傷病ノ規定ノ適用ニ付テノ階等ハ左ノ區分ニ依ル

一　教育職員ノ階等ハ其ノ官等等級又ハ待遇官等等級ニ依リ勅任官、奏

任官又ハ判任官ノ待遇ヲ受クルモ官等級ノ定ナキ者ハ各其ノ最下位ノ官等等級ニ依ル

二　準教育職員ノ階等ハ公立學校職員待遇官等等級令別表第二表ノ例ニ準ス

第二十八條　警察監獄職員ノ公務傷病ノ規定ノ適用ニ付テノ階等ハ判任官四等トス但シ警部補ハ其ノ等級ニ依ル

第二十九條　待遇職員ノ公務傷病ノ規定ノ適用ニ付テノ階等ハ其ノ待遇官等等級ニ依リ勅任官、奏任官又ハ判任官ノ待遇ヲ受クルモ官等等級ノ定ナキ者ハ各其ノ最下位ノ官等等級ニ依ル

第三十條　恩給法六十二條五項ニ規定スル中學校ト同等以下ノ程度ノ學校トハ左ニ掲クルモノヲ謂フ

一　師範學校

二　高等女學校

三　專門學校令ニ依ラサル實業學校（實業補習學校ヲ除ク）

四　中學校又ハ前二號ニ掲クル學校ニ準スヘキ學校

五　實業補習學校教員養成所

六　朝鮮又ハ臺灣ニ於ケル中學校又ハ一號乃至三號若ハ五號ニ掲クルモノニ準スヘキモノ

七　在外指定學校ニシテ中學校又ハ一號乃至三號ニ掲クル學校ニ準スヘキモノ

第三十一條　恩給法六十六條四項ノ規定ニ依リ傷病ノ程度ヲ分チテ左ノ十款トス

第一款症

一　一側睾丸ヲ全ク失ヒタルモノ

二　一眼ノ視力カ視標〇、一ヲ二メートル以上ニテハ辨別シ得サルモノ

三　一耳聾シタルモノ

四　一側拇指ヲ全ク失ヒタルモノ

第二款症

一　一耳ノ聽力カ耳殼ニ接セサレハ大聲ヲ解シ得サルモノ

二　一側拇指ノ機能ヲ廢シタルモノ

第三款症

一　一眼ノ視力カ視標〇、一ヲ三メートル以上ニテハ辨別シ得サルモノ

二　一耳ノ聽力カ十センチメートル以上ニテハ尋常ノ話聲ヲ解シ得サルモノ

三　一側示指ヲ全ク失ヒタルモノ

四　一側第一趾ヲ全ク失ヒタルモノ

第四款症

二　取引所ノ停止

三　取引所一部ノ停止又ハ禁止

四　役員ノ解職

五　會員又ハ取引員ノ營業停止若ハ除名

第二十八條　農商務大臣ハ必要ト認ムルトキハ官吏ヲシテ取引所ノ業務帳簿財産其ノ他一切ノ物權及會員又ハ取引員ノ帳簿ヲ檢査セシムルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ取引所ノ役員會員及取引員ハ其ノ物件ヲ提供シ質問ニ應答スヘシ

第二十九條　農商務大臣ハ必要ト認ムルトキハ取引所ノ定款ヲ改正セシメ又ハ其ノ決議及處分ヲ停止シ、禁止シ若ハ取消スコトヲ得

第三十條　取引所任意ノ解散ハ政府ノ認可ヲ受クヘシ

第三十一條　十七條一項ノ規定ニ違反シ又ハ同條二項ノ特別ノ利害關係ヲ生スルコトヲ目的トスル行爲ヲ爲シタル者ハ五千圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十二條　十一條ノ四ノ規定ニ違反シタル者ハ三千圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十二條ノ二　取引所ノ役員又ハ取引所ニ於ケル受渡物件ノ格付ヲ爲ス

者其職務ニ關シ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ要求若ハ約束シタルトキハ一年以下ノ懲役又ハ三千圓以下ノ罰金ニ處ス因テ不正ノ行爲ヲ爲シ又ハ相當ノ行爲ヲ爲サルルトキハ三年以下ノ懲役又ハ五千圓以下ノ罰金ニ處ス

前項ノ場合ニ於テ收受シタル賄賂ハ之ヲ沒收ス若シ其ノ全部又ハ一部ヲ沒收スルコト能ハサルトキハ其ノ價格ヲ追徵ス

第三十二條ノ三　差ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ一年以下ノ懲役又ハ三千圓以下ノ罰金ニ處ス

一　取引所ノ役員又ハ取引所ニ於ケル受渡物件ノ格付ヲ爲ス者ニ賄賂ヲ交付、提供又ハ約束シタル者

二　取引所ニ於ケル相場ヲ僞リテ公示シタル者

三　公示若ハ頒布ノ目的ヲ以テ虛僞ノ相場ヲ記載シタル文書ヲ作製シタル者又ハ之ヲ頒布シタル者

四　免許ヲ受ケスシテ取引所ヲ設立シタル者又ハ第二十六條)ノ二ノ規定ニ違反シタル者

前項一號ノ罪ヲ犯シタル者自首シタルトキハ其ノ刑ヲ減輕又ハ免除スルコトヲ

第三十二條ノ四　取引所ニ於ケル相場ノ變動ヲ圖ル目的ヲ以テ虛僞ノ風論ヲ流布シ、僞計ヲ用ヒ又ハ暴行若ハ脅迫ヲ爲シタル者ハ二年以下ノ懲役又ハ五千圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十二條ノ五　取引所ニヨラスシテ取引所ノ相場ニ依リ差金ノ受授ヲ目的トスル行爲ヲ爲シタル者ハ一年以下ノ懲役又ハ二千圓以下ノ罰金ニ處ス但シ刑法八十六條ノ適用ヲ妨ケス

五　教育事務從事ノ從前ノ區、統監府又ハ關東都督府ノ官吏

第三十五條　廢官、廢職、廢廳、廢校若ハ官職名改定ノ際其ノ廢改ニ係ル官職ニ在リタル者又ハ定員ノ減少ニ因リ退職シタル者即日又ハ翌日他ノ官職ニ任セラレタルトキハ恩給法ノ適用ニ付テハ之ヲ勤續ト看做ス(大正十五年

勅令第三百四號ヲ以テ本條ヲ改正)

第三十六條　恩給法百一條ノ規定ニ依ル增額ハ左ノ區分ニヨル

一　軍人以外ノ公務員ノ普通恩給又ハ遺族ノ扶助料ノ年額ヲ更正スル場合ニ於テハ其ノ年額算出ノ基礎ト爲リタル俸給カ大正九年七月三十一日以前ノ俸給令ニヨルモノナルトキハ別表四號表ノ區分ニヨリ增加シタル金額ヲ俸給年額ト爲シ、其ノ他ノモノナルトキハ在職最終ノ俸給年額ヲ基礎トシテ恩給法六十條、六十二條、六十三條及七十五條ノ規定ニヨリ算出シタル年額ヲ以テ其ノ普通恩給又ハ扶助料ノ年額トス

二　軍人又ハ準軍人ノ普通恩給又ハ遺族ノ族助料ノ年額ヲ更正スル場合ニ於テハ別表五號表ニヨリ當該軍人又ハ準軍人ノ階等ヲ定メ恩給法六十一條及七十五條ノ規定ニヨリ算出シタル年額ヲ以テ其ノ普通恩給又ハ扶助料ノ年額トス

三　增加恩給ノ年額ヲ更正スル場合ニ於テハ退職當時ノ階等竝別表六號表ニヨリ定メタル傷病ノ原因及不具廢疾ノ程度ニ從ヒ恩給法六十五條ノ規定ニヨリ算出シタル年額ヲ以テ其ノ增加恩給ノ年額トス但シ陸海軍准士官ニシテ其ノ官ニ對スル最高俸ヲ受ケタルモノノ階等ハ之ヲ尉官トシ名譽進級ニ因ル階等ヲ進メラレタル軍人ノ階等ハ名譽進級ニ因ル階等トス

第二十五條乃至二十九條ノ規定ハ增加恩給年額ノ更正ニ付之ヲ準用ス

四　執達吏ノ恩給ヲ更正スル場合ニ於テハ一號ノ規定ニヨラス六百圓ヲ俸額年額ト看做シ恩給法六十條ノ規定ニヨリ算出シタル年額ヲ以テ其ノ普通恩給ノ年額トス

前項ノ增額ヲ爲ス場合ニ於テハ外國勸續ニ因ル加給ハ之ヲ爲サス

第三十七條　恩給法百二條ノ規定ニ依リ普通恩給又ハ遺族ノ扶助料ノ年額

ヲ增額スル場合ニ於テハ其ノ年額算出ノ基礎ト爲リタル退職又ハ死亡當時ノ俸給年額ヲ別表七號表ニヨル假定俸給年額ニ增加シ之ヲ退職又ハ死亡當時ノ俸給年額ト看做シ之ニ恩給法百一條ノ規定ヲ適用ス

附　則

第三十八條　本令ハ大正十二年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

第三十九號　左ノ命令ハ之ヲ廢止ス

一　明治二十四年勅令第二百四十八號
一　明治二十七年勅令第五十二號
一　明治二十七年勅令第八十一號
一　明治二十七年勅令第百四十五號
一　明治三十一年勅令第二百四十四號
一　明治三十二年勅令第二百一號
一　明治三十三年勅令第百七十三號
一　明治三十三年勅令第四百四號
一　巡査看守退隱料及遺族扶助料法施行令
一　明治三十四年勅令第百五十號
一　明治三十五年勅令第五十七號
一　明治四十一年勅令第百三十七號
一　明治四十三年勅令第百二十七號
一　明治四十四年勅令第七十號
一　大正六年勅令第二百四十一號
一　大正六年勅令第二百四十二號
一　大正九年勅令第三百二十三號
一　明治十八年第十五號達官吏恩給令附則
一　明治十八年第十六號達文官傷痍疾病差例
一　明治十八年第四十號達陸軍恩給令附則

第四十條　第十條各號ニ掲クル官制ニヨリ廢止セラレタル官制又ハ其レニヨリ廢止セラレタル官制ニヨリテ判任官以上ノ待遇ヲ受ケタル職員ハ在職年通算ノ關係ニ於テハ之ヲ當該各號ニ掲クル官制ニヨル職員ト看做ス

附　則（大正十二年勅令第五二〇號附則）

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス但シ第四十條ノ規定ハ大正十二年十月一日ヨリ之ヲ適用ス

附　則（大正十三年勅令第五一號附則）

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

從來ノ水雷艇乘員）トシテノ勤務ニ付テハ仍從前ノ規定ニ依ル

附　則（大正十三年勅令第四〇七號附則）

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

港務部設置制ニヨル待遇職員ハ仍之ヲ第十條第六號ニ掲クル待職職員ト看做ス

附　則（大正十五年勅令第二四四號附則）

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

郡判任官ハ仍之ヲ第六條第一號ニ掲クル文官ト看做ス

附　則（大正十五年勅令第三〇四號附則）

本令ハ大正十五年九月十五日ヨリ之ヲ施行ス

附　則（昭和二年勅令第三六二號附則）

本令ハ昭和三年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

◎具申書ノ雛形（此ノ通リナル事ヲ要セス）

具申書

住所

具申者　何　某

年　月　日生

對手者タル行政廳

具申ノ趣旨

年月日何廳ニ於テ爲シタル何年何月ヨリ何年何月迄ノ恩給金何圓ヲ支拂ハサルハ不當ナル處分ナルヲ以テ右ヲ支拂フ可シトノ裁決ヲ求ム

理由

一、何々

立證

一、何々

年　月　日

右

某　㊞

内閣恩給局長何某殿

◎普通恩給請求書ノ書式

普通恩給請求書

何年何月何日　ヲ退職致候ニ付普通恩給ヲ給與相成度證據書類相添へ請求候也

退職當時ノ官職名　何々
本籍地
現住所

年　月　日

某　㊞

内閣恩給局長　殿
支給郵便局　何々

請求書ニハ振假名ヲ付スルコト

添付書類

一、在職中ノ履歴書　二通
二、戸籍抄本
三、前恩給證書（前ニ恩給ヲ受ケサルトキハ必要ナシ）

氏名ニ振假名ヲ付スルコト

普通恩給
增加恩給 請求書

何年何月何日何々ヲ退職致候ニ付普通恩給及增加恩給ヲ給與相成度
證據書類相添へ請求候也

退職當時ノ官職名
本籍地
現住所

年　月　日

某　㊞

內閣恩給局長　殿
支給郵便局　何々

添付書類

一、在職中ノ履歷書　二通
二、戶籍抄本
三、傷痍疾病カ公務ニ起因シタルコトヲ認ムルニ足ルヘキ書類
四、症狀ノ經過書類
五、請求當時ノ診斷書
六、恩給證書（前ニ恩給ヲ受ケタルトキ）

増加恩給請求書

何年何月何日（官職）ヲ退職致シ候處在職中ノ傷病重症ニ赴キ候ニ付増加恩給ヲ給與相成度證據書類相添ヘ請求候也

年　月　日

本籍地
現住所　何々

内閣恩給局長何々殿
支給郵便局　郵便局

◎請求者ノ氏名ニハフリカナヲ附スコト

扶助料請求書

公務員又ハ
普通恩給權者　何々　某

氏名ニ振假名ヲ付スヘシ

右ハ年月日死亡候ニ付扶助料ヲ給與相成度證據書類相添ヘ請求候也

本籍地
現住所

年　月　日

某　㊞

内閣恩給局長　殿
支給郵便局何々

添付書類

イ　在職中死亡ノ場合

一、履歴書　二通

二、戸籍謄本

三、恩給證書（公務員ノ恩給アルトキ）

ロ　普通恩給ヲ受クル者死亡ノ場合

一、恩給證書

二、戸籍謄本

ハ　死因カ公務ニ依ル場合

一、（イ）ノ書類

二、死因カ公務ニ起因シタルコトヲ認メルニ足ル書類

三、症狀ノ經過ヲ記シタル書類

四、死亡診斷書

扶助料請求書

前扶助料權者　氏　名

右者年月日失權候ニ付扶助料ヲ給與相成度證據書類相添へ請求候也

公務員又ハ普通恩給權者トノ身分關係

本籍地　何々

現住所　何々

氏　名㊞

年　月　日

内閣恩給局長氏名殿

支給郵便局長氏名殿

支給郵便局○○郵便局

◎請求者ノ氏名ニハフリカナヲ附スヘシ

○氏名ニハ假名ヲ付スヘシ

一時恩給請求書

年月日何々ヲ退職致候ニ付一時恩給ヲ給與相成度證據書類相添へ請求候也

退職當時ノ官職名
本籍地
現住所

年　月　日

内閣恩給局長　殿
支給郵便局

某　㊞

添件書類
一、在職中ノ履歴書　二通

氏名ニハ振カナヲフスルコト

一時扶助料請求書

公務員又ハ普通恩給權者ノ退職當時ノ官職名　何々　某

右者年月日死亡候ニ付恩給法第八十一條ノ規定ニヨリ一時扶助料ヲ給與相成度證據書類相添へ請求候也

公務員又ハ普通恩給權者トノ身分關係　某　ノ　妹
本籍地
現住所

年　月　日

内閣恩給局長　殿
支給郵便局　何々　殿

某　㊞

添付書類

一、請求ニ必要ナル證明書或ハ診斷書
二、請求者ノ戸籍謄本
三、公務員ノ履歴書

氏名ニハフリカナヲ付スルコト

一時扶助料請求書

公務員ノ官職名　何々　何某

右者年月日在職中死亡候ニ付恩給法八十二條ノ規定ニ依リ一時扶助料ヲ給與相成度證據書類相添へ請求候也

公務員トノ身分關係　何々ノ妻
本籍地
現住所

年　月　日

内閣恩給局長　殿
支給郵便局　何々

某　㊞

添付書類

一、公務員ノ在職中ノ履歴書

二、請求者ノ戸籍謄本

傷病賜金請求書

年月日(官職)ヲ退職致候ニ付傷病賜金ヲ給與相成度證據書類相添へ請求候也

退職當時ノ官職名

本籍地

現住所

氏名 ㊞

年　月　日

内閣恩給局長氏名殿

支給郵便局○○郵便局

◎請求者ノ氏名ニハフリカナヲ付スヘシ

扶助料轉給請求書

停止中ノ扶助料權者　氏　名

右者犯罪又ハ所在不明ニ因ル扶助料停止期間中扶助料ヲ轉給相成度
證據書類相添ヘ請求候也

公務員トノ身分關係
本籍地
現住所

年　月　日

氏　名　㊞

内閣恩給局長氏名殿

支給郵便局〇〇郵便局

◎請求者ノ氏名ニハフリカナヲ付スヘシ

扶助料停止請求書

停止セラルヘキ扶助料權者　氏　名

右者年月日以來所在不明ニ付扶助料ヲ停止相成度證據書類相添ヘ請求候也

年　月　日

公務員トノ身分關係
申請者　氏　名　㊞

内閣恩給局長氏名殿

◎請求者ノ氏名ニハフリカナヲ付スヘシ

再審査請求書

年月日退職ニ因リ普通恩給増加恩給ヲ給セラレ候處未タ疾病回復セサルヲ以テ再審査相成度證據書類相添へ請求候也

退職當時ノ官職名

本籍地

現住所　　氏名　㊞

年　月　日

内閣恩給局長氏名殿

支給郵便局○○郵便局

◎請求者ノ氏名ニハフリカナヲ付スヘシ

履歴書

退職當時ノ官職名

氏名

生年月日

年月日	事記	官公署名

右相違ナキコトヲ證ス

年　月　日

退職當時ノ所屬長

官職氏名㊞

注意

一、履歴書ハ二通提出スヘシ

一、學歴、位記、勳記、賞與等ノ記載ヲ要セス

一、官職ノ任免、轉任、昇給等ハ順ヲ逐ヒ間隙ナキ樣ニ詳記スヘシ

一、退職ノ事由ヲ明記スヘシ

一、退職當時ノ所屬廳ノ長ハ他廳ニ關スル事項ニ付テハ照會ノ上之ヲ詳記スヘシ

現認證明書

公務員ノ官職名

氏　名

右者年月日午前　時　分　地ニ於テ何々ニ從事中何々ニヨリ負傷シタルコトヲ現認候也

住所又ハ官職名

現認者　氏　名㊞

年　月　日

◎本證明ニハ傷病當時ノ狀況ヲナルヘク詳細ニ記載スヘシ

事實證明書

公務員ノ官職名

氏　名

右者年月日ヨリ何々ニ從事中年月日何々ノ狀況ニ於テ何々ニ從事シ
年月日頃ヨリ何ノ症狀アルヲ訴ヘ爾後何ノ處置ヲ施シタリ
右證明ス

年　月　日

所屬長　氏　名　㊞

近刊紹介

選擧ニヨリ起リタル裁判トソノ判決

判決調査會

昭和四年十一月[illegible]日印刷
昭和四年十二月[illegible]日發行

定價金二圓八十錢

編纂者　東京北豐島郡巢鴨町大字巢鴨千八百五十四番地　相馬喜作
發行人　東京北豐島郡巢鴨町大字巢鴨千八百五十四番地　相馬セイ
印刷所　東京麹町區三番町十六番地　川島印刷所
印刷者　東京麹町區三番町十六番地　川島良明

不許復製

發行所　振替口座東京二五五二六番
電話大塚一七八七番　東京巢鴨町宮下千八百五十四番地　判決調査會

147
476